イタリアの学校・社会における舞台表現教育の取り組みと音楽表現の関わりについて

研究課題番号：20530807

平成 20～23 年度
日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）

研究成果報告書

平成 24 年 3 月

研究代表者

中 嶋 俊 夫

（横浜国立大学教育人間科学部准教授）

はしがき

私が「イタリアの音楽教育の動向と展望」というテーマで修士研究をしてから四半世紀が経ったが、その間、芸術文化、社会、教育の諸相からイタリアという国を見続けてきた。これまでの知見からイタリアと日本という二つの国を比較すると、日本の教育実践は中央集権的な体制により成果を上げてきたのに対し、イタリアでは中央で打ち出された理念が、なかなか末端に至る結果につながりにくいという傾向にある。しかしイタリアには優れたアイデアがあり、何か実践的結果を生み出す時、体制のバックアップに支えられてというよりは、それら個々（人・場所）の創意や独自性が原動力になっているという印象がある。このような場合、その創意に周囲の関係者をどのように巻き込めるかが重要であるが、そのために皆が論理的に納得するという段階を決しておろそかにしない。イタリアでは言葉で説明し、自分の考えを語り合うことがいつでも大切である。

2004年８月にミラノの書店 Feltrinelli でロンバルディア州の教育研究所が刊行した『学校のテアートロ―評価、 実態調査、 実践』Il Teatro della Scuola, Riflessioni, indagini ed esperienze（IRRSAE-Lombardia 2001）を手にし、私は「テアートロ」というキーワードからイタリアの新しい教育動向に注目するようになった。同じころ私の音楽教育研究は、音楽の表現体験が生まれる時、表現者（あるいは参加者）一人一人がその表現体験の「場」にどのように参加し、活動と関わるのかということに目的を見出していた。

これらの経緯から、「テアートロ」（舞台表現）と「場」の２つのキーワードから研究の方向性を定め、平成20年度（後半）から科学研究費の助成により本研究を始めるに至った。本書ではその調査・研究の成果を報告するとともに、課題や問題について考察を進めながら、今後のわが国の教育研究・実践の発展へとつなげていきたいと考える。

研究課題・組織

イタリアの学校・社会における舞台表現教育の取り組みと音楽表現の関わりについて

Research on the Relation between Theater Education (Educazione Teatrale) and Musical Expression in Schools and Society of Italy

研究種目：基盤研究（C）
研究機関：平成20年度（2008）～平成23年度（2011）
研究課題番号：20530807
研究組織：研究代表者　中嶋俊夫

研究経費（直接経費）	平成20年度	700千円
	平成21年度	900千円
	平成22年度	500千円
	平成23年度	600千円
	計	2,700千円

研究発表

1．論文

1）「イタリアの舞台表現教育の動向と創意―ロンバルディア州ミラノ県の取り組みを中心に」『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅰ』（教育科学）No.12, pp.119-134, 2009年２月
2）「小学校音楽学習指導要領の理念『思いや意図をもって』をどう捉えるか―小学校教員対象の研修（神奈川県立総合教育センター主催）」『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅰ』（教育科学）No.13, pp. 111-128, 2011年２月
3）「イタリアの新しいカリキュラムとテアートロ教育にみる音楽表現の可能性―わが国の教育実践と関わって」『音楽教育実践ジャーナル』日本音楽教育学会編、vol.9 no.2, pp.131-142, 2012年３月

2．口述発表

1）「音楽表現が生きる『場』の形成についての一考察―イタリアの舞台表現教育に示唆を求めて」日本音楽教育学会 第39回大会、於、国立音楽大学、2008年11月９日
2）「イタリアの舞台表現教育の動向と創意―ロンバルディア州の取り組みを中心に」日本音楽表現学会 第７回（プロムナード in フォレスト）大会、於、宮城教育大学、2009年６月14日
3）「イタリアの小中学校におけるテアートロ教育の現状と創意―ロンバルディア州の取り組みを中心に」星美学園短期大学　日伊総合研究所　第6回研究会、於、星美学園短期大学、2010年２

月22日
4）「イタリアの学校における表現教育の新しい展開―テアートロ教育と音楽教育の２つの視点から」イタリア学会 第58回大会、於、大阪大学豊中キャンパス、2010年10月23日
5）「イタリアの音楽テアートロ教育の理論と実践」日本音楽教育学会第42回大会、於、奈良教育大学、2011年10月22日

3．講演

1）『音楽テアートロ―イタリアと日本の初等教育における研究と教員養成の取り組み』Il Teatromusicale − esperienza formativa e ricerca nel primo ciclo d'istruzione in Giappone e in Italia, イタリア音楽教育協会（SIEM）ミラノ支部と国立ミラノ・ビコッカ大学教育科学部共催によるセミナー、於、ミラノ・ビコッカ大学教育科学部、2011年３月14日
2）『音楽テアートロ―領域横断的体験』Il teatro musicale − Un'esperienza interdisciplinare, 教職研修組織（OPPI）とイタリア音楽教育協会（SIEM）ミラノ支部共催による教育セミナー、於、民衆大学（ミラノ市）、2012年３月17日

4．研修会・特別授業

1）「『思いや意図をもって』表現する」神奈川県教員研修「確かな学力を育む教科指導研修講座６小学校音楽」（神奈川県立総合教育センター主催）於、同センター、2009年７月27日、2010年７月29日
2）「音楽科指導の課題：子どもの自発的な表現を育てるために―イタリアの舞台表現教育に学ぶ」現職教員のための指導力養成講座・ワークショップＢ（横浜国立大学教育人間科学部音楽教育講座主催）於、横浜国立大学教育人間科学部、2009年８月３日
3）「テアートロ表現と音楽教育－音楽言語はシーン（場）によって生かされる」La pedagogia musicale con l'aspetto della teatralità − Linguaggio musicale è prende vita in scena, サクロ・クオーレ・カトリック大学ミラノ校・教育科学部マスターコース『舞台表現性による創造性と人間的成長』Creatività e Crescita personale attraverso la teatralità、於、サクロ・クオーレ・カトリック大学ミラノ校、2009年10月31日
4）「テアートロ表現と音楽教育のラボラトリ活動」L'attività di laboratorio dell' educazione musicale con l'aspetto della teatralità, サクロ・クオーレ・カトリック大学ミラノ校・教育科学部マスターコース『語りとテアートロ表現相互による教育方法の実践』Azioni e interazioni pedagogiche attraverso la narrazione e l'educazione alla teatralità、於、サクロ・クオーレ・カトリック大学ミラノ校、2011年３月５日.

イタリアでの実地調査：主な訪問先と用務内容

第１回

期間：2009年２月28日～３月11日

①ロンバルディア州教育研究所（Nucleo territoriale della Lombardia-Agenzia Nazionale per lo Sviluppo dell' Autonomia Scolastica : ANSAS, ex IRRE、在、ミラノ）

・同州学校と地域におけるテアートロ表現教育の取り組みについてディ・ラーゴ prof. R. Di Rago 研究員から情報収集

②サクロ・クオーレ・カトリック大学ミラノ校教育科学部（Facoltà di Scienze della formazione: Università Cattolica del Sacro Cuore – Milano）

・オリーヴァ教授 prof. G. Oliva のテアートロ表現教育関連の授業、「ドラマトゥルギー」Drammaturgia,「テアートロ教育ラボラトリー」Teatro d'animazione、および現職教員らを対象とした同大学マスターコースの研修活動を参観、オリーヴァ教授と研究交流

③テアートロ研究センター「舞台－教育」（Centro Ricerche Teatrali "Teatro-Educazione"、在、ヴァレーゼ 県 Varese ファニャーノ・オローナ市 Fagnano Olona）

・研修授業を参観、授業者オリーヴァ教授および研修参加者と協議

④ A. ポンティ高校（Istituto Statale Istruzione Superiore "A. Ponti"、在、ヴァレーゼ県 Varese ガッララーテ市 Gallarate）

・テアートロ表現のラボラトリ授業を参観、同校教員と意見交換

第２回

期間：2009年5月16日～ 26日

①文化協会「少年たちの舞台」（Associazione Culturale "Un Palcoscenico per i Ragazzi"、在、ミラノ県ベッルスコ市 Bellusco）およびミラノ第60学区（ヴィメルカーテ市 Vimercate 他）の劇場・ミラノ県第60学区で活動する文化協会＜少年たちの舞台＞（代表 チェッレーダ prof. B. Cerreda）から招聘を受け、同協会主催の第22回大会に参加。子どもたちの舞台表現の発表を観察。同協会と学校が連携し、推進するテアートロ教育プロジェクトの実情を把握、教師、舞台関係者らと意見交換、情報収集

②ミラノ県第60学区の小中学校：ドン・ゼノ Don Zeno 中学校（オレーノ市 Oreno）、ドン・ニョッキ Don Gnocchi 小学校（コンコレッツォ市 Concorezzo）、A. モーロ A. Moro 小学校（カネグラーテ市 Canegrate）

・授業参観、教員たちと交流、テアートロ教育の指導方法について情報収集

第３回

期間：2009年10月24日～ 11月４日

①サクロ・クオーレ・カトリック大学ミラノ校教育科学部

・ マスターコース授業「舞台表現性による創造性と人間的成長」Corso di perfezionamento “Creatività e Crescita personale attraverso la teatralità” において講義、参加した学生および学校教師らと日伊の表現教育について討議（10月31日）

・学部授業「テアートロ教育ラボラトリ」を参観、オリーヴァ教授と研究交流

②ミラノ県第60学区の小中学校：ドン・ゼノ中学校（オレーノ市)、ドン・ニョッキ小学校（コンコレッツォ市)、A. モーロ小学校（カネグラーテ市）

・授業およびテアートロ教育活動を参観

・ドン・ゼノ中学校で日本の学校生活や音楽授業の実際について映像資料を使って紹介、生徒、教師たちと討議

③ロンバルディア州教育研究所（ANSAS, ex IRRE)

・ディ・ラーゴ研究員から最近のイタリアの教育事情について情報収集、日伊相互の比較研究を進めていくことについて合意

第４回

期間：2011年３月３日～ 21日

①サクロ・クオーレ・カトリック大学ミラノ校教育科学部

・マスターコース授業「語りとテアートロ（舞台） 表現相互による教育方法の実践」Corso di Perfezionamento “Azioni e Interazioni pedagogiche attraverso la Narrazione e l’Educazione alla Teatralità” において講義とワークショップ、参加した学生および学校教師らと日伊の表現教育について討議（３月５日）

②国立ミラノ・ビコッカ大学教育科学部（Facoltà di Scienze della formazione : Università degli Studi di Milano-Bicocca）

・E. フェッラーリ講師の「音楽と音楽教育法」Musica e didattica della musica の授業を参観、同講師と情報交換（３月８・９日）

・同大学同学部とイタリア音楽教育協会 Società Italiana per l’ Educazione Musicale（SIEM）ミラノ支部共催セミナー『音楽テアートロ―イタリアと日本の初等教育における研究と教員養成の取り組み』Il Teatromusicale：esperienze formative e ricerca nel primo ciclo d’istruzione in Giappone e in Italia にて講演。参加者と協議、イタリア音楽教育協会ミラノ支部長で、『音楽テアートロ』（Bove 2006）の著者であるボーヴェ氏 P. Bove と研究交流（於：同大学同学部、３月14日）

③ロンバルディア州教育研究所

・同州が推進する＜プロジェクト音楽・2020＞ Progetto Musica 2020 について調査し、所長ジェルメッティ P. Germetti、ラパッツォ P. Rapazzo、スカラブリーニ F. Scalabrini、ディ・ラーゴの四氏と協議、今後日本との比較研究を進めていくことについて合意（３月16日）

④ドン・ゼノ中学校（オレーノ市)、聖エリア Sant’ Elia 小学校（コモ市 Como）

・授業および表現活動実践を参観、教員たちと交流（３月７・15日）

第５回

期間：2012年年３月１日～21日
①国立ミラノ・ビコッカ大学教育科学部
・P. ボーヴェ講師の「音楽テアートロ教育」ラボラトリ授業を観察し、同講師と情報交換を行った（３・10日）
・E. フェッラーリ講師の「音楽と音楽教育法」の授業を参観、同講師と情報交換（３月12日）
②ロンバルディア州教育研究所
・R. ディ・ラーゴ研究員から情報収集（６日）
③コンコレッツォ市サン・ルイージ劇場（Cineteatro San Luigi Concorezzo）
・小学生のための演劇鑑賞会を視察（８日）
④ドン・ゼノ中学校（オレーノ市）
・授業観察および教師たちとの情報交換（８日）
⑤ミラノ市立音楽学校訪問（Milano Civica Scuola di Musica）
・授業参観（９日）
⑥イタリア音楽教育協会（SIEM : Società Italiana per l' Educazione Musicale）本部（在、ボローニャ市 Bologna）および同ミラノ支部
・情報収集、セミナー打ち合わせ、原稿校正（13・15・16日）
⑦民衆大学（Università Popolare, 在、ミラノ）
・イタリア音楽教育協会ミラノ支部および教職研修組織（OPPI : Organizzazione per la Preparazione Professionale degli Insegnanti）共催によるセミナー「音楽テアートロ―領域横断的経験」にて講演、日本の小学校と教員養成課程における教育実践例を紹介、イタリアの研究者や教員と協議（17日）
⑧国立ミラノ・ヴェルディ音楽院（Conservatorio di Musica “G. Verdi di Milano）
・学生のオペラ公演、ドニゼッティ『愛の妙薬』を鑑賞（18日）
⑨ロンゴーネ Longone 小学校（ミラノ市）
・音楽授業参観（19日）

○出張先での主な対応者
・P. ボーヴェ（イタリア音楽教育協会ミラノ支部長、国立ミラノ大学ビコッカ講師）
・R. ディ・ラーゴ研究員（ロンバルディア州教育研究所）
・B. チェッレーダ（文化協会「少年たちの舞台」代表、中学校教諭）
・G. オリーヴァ（サクロ・クオーレ・カトリック大学ミラノ校教育科学部講師、テアートロ研究センター「舞台－教育」所長）
・E. フェッラーリ（国立ミラノ大学教育科学部講師）

目　次

はしがき…… 1
研究課題・組織…… 2
研究発表…… 2
イタリアでの実地調査：主な訪問先と用務内容…… 4

Ⅰ　序 ―研究の目的・背景・内容―…… 9

Ⅱ　イタリアの学校におけるテアートロ教育の導入 ―背景と理念― … 13

Ⅲ　テアートロ教育の指導者養成 …… 22

Ⅳ　ミラノ県第60学区の取り組み …… 26

Ⅴ　イタリアの新しいカリキュラムと表現教育の位置づけ …… 43

Ⅵ　テアートロ・ムジカーレの実践論 …… 47

Ⅶ　日本の音楽科教育の課題とテアートロ教育の関連…… 53

Ⅷ　結び ―わが国の教育実践と関わって― …… 61

付録…… 67
・文化協会「少年たちの舞台」2009-2010年度報告書より
・国立ミラノ・ ビコッカ大学とイタリア音楽教育協会ミラノ支部共催セミナー要項（2011.3.14）
・教職研修組織 OPPI とイタリア音楽教育協会ミラノ支部共催セミナー要項（2012.3.17）
・同講演内容と資料
・サクロ・クオーレ・カトリック大学ミラノ校マスターコースで行った授業の配布レジュメ
・写真「イタリアの学生・教師・研究者たちと」

引用・参考文献…… 91

あとがき…… 93

Ⅰ　序　―研究の目的・背景・内容―

1．表現体験を共有する「場」―音楽科教育・教員養成と関わって―

（1）表現体験の共有

音楽科教育では知識理解、技能習得を学習の基盤としながら、個々人が感受と表現の両面において感性を磨き、表現力を育成していくことが求められる。一方音楽の表現活動は、集団の中で他者と関わり、互いに触発し合いながら発想・工夫・表現の力を高めていく。そこで大切なことは、共に学ぶ共同体の中で個と全体が差異や共通性を認識しながら、いかに共感したり、表現内容を共有したりできるかということである。筆者は教育現場でさまざまな表現活動と関わりながら、その場に集まった一人一人が「自分は生かされている」と実感できる場を、どのようにつくり出すかを志向してきた。そしてこの視点に基づいて実践を積み重ねる中で、集団において表現体験が共有されるためには、「個人の独自性」と「他者との共通性」の両方が交流する「場」が必要であると考えた。それはつまり、集団において共通性だけを求めるのではなく、そこに個人の独自性が生かされなければ表現体験の共有は深まらないだろうということである。

（2）教員養成カリキュラムの視点から

教員養成課程において、音楽科の指導内容を学生たちが体験的に捉えられるよう支援する中で、筆者は表現体験を共有する場づくりを大切にしてきた。「初等音楽科教育法」（２年対象）の授業で学生たちが取り組む「歌唱指導体験」（模擬授業形式）では、身体表現、絵図、イメージ、あそびなどが活用されるが、それらは歌唱指導へと生かされることを目的としながら、同時に雰囲気づくりや、同じ場にいる者同士の共感を高めようとする意図が働いている（中嶋 2007）。

一方「教育実地研究」授業の一環として、平成13年度から本学部附属小学校で「小学生と大学生の交流音楽会」を実施してきた[1]。この交流音楽会に際し、授業者（筆者）が履修学生に条件として求めることは「児童が参加して音楽表現する場をつくること」のみで、あとは学生が主体となって企画・実施していく。ここで2004年11月、本学部附属横浜小学校で2年児童120人を対象に行われた交流音楽会の例を取り上げる。

＜歌パワーを取り戻せ～横浜小学校誘拐事件＞と題して始まった会（劇）は、冒頭、児童たちの目の前で音楽の教師が悪魔（男子学生）に誘拐され、子どもたちは騒然となる。音楽の教師を助けようと悪魔に挑んだ主人公の少年（女子学生）は、魔力にかかって歌パワーを奪われてしまう。歌パワーを取り戻し、そのパワーで音楽の教師を助け出すために、指南役となる３人の女神（「リズム」「メロディ」「振付」）を訪ねて修業を積む。この時なかなかうまく表現できない主人公を、それまで観衆の立場にいた子どもたちがいっしょに表現して助けるというストーリー（展開）である。劇の場面づくりとして衣装や背景画、音楽、効果音などが活用されるが、実際に臨場感のある場は子どもたちの想像力によってつくられていく。その場を児童と大学生が共有して音楽表現できたと

[1] この活動は、学校教育課程２年学生たちが、子どもたちと表現活動を通して交流しながら教育現場の実際を理解すること、音楽科指導について関心を持つことを目的として実施された（中嶋 2007）。「教育実地研究」は、平成22年度の新カリキュラムで１年学生対象の授業となった。

き、両者の感動が生まれることをこの交流音楽会は教えてくれている。「児童が参加して音楽表現する場」という条件に応えるため、大学生は劇の要素を活用しているが、それはストーリーの中に誘い込んで、そこで音楽表現をせずにはいられない状況をつくり出すことに着眼したためである。そこには、子どもの興味・関心はどこに向けられるのか、表現意欲はどのような場面で喚起されるのかといった、音楽の表現と学習にとって普遍的なモデルが示されている。

こうして学生たちは、子どもたちと友好関係を育みながら、自分たちが構想したストーリーや場面設定を通して児童の興味が喚起され、意欲的な音楽表現が生まれることを体験する。

附属横浜小学校２年児童と学校教育課程音楽専門領域２年学生との交流音楽会（2008年12月）

（3）「場」への指向

筆者はこれら学生たちの実践活動を通して、表現体験の共有は「２つの場」の相互連関によって図られることについて考察した（中嶋2007）。「２つの場」とは、人が物理的な位置関係によって表現者として存在する「現実の場」と、表現内容の解釈と関わるつまり「もう一つの場」である。人と人が体験の共有度を高めるために「現実の場」は、自分と他者が交流する好ましい状況でなければならない。また表現の共有度を高めるためには、表現内容の解釈にともなう想像やイメージによってつくり出される世界、つまり「もう一つの場」において共感することが求められるだろう。どちらの「場」にも共通することは、自分がそこに身を置いているという「身体性」によって「場」が捉えられるということであると考える。表現・解釈を促し、感動体験を共有するために、これら２つの「場」への働きかけが有効であると、筆者は実践を通して認識している。

附属横浜小学校２年児童と学校教育課程音楽専門領域２年学生との交流音楽会　（2005年11月）

（4）開かれた学校

「小学生と大学生の交流音楽会」を振りかえると、２つのグループが出会い、表現活動の場を通して交流することに大きな意味があった。ここから発展的に捉えると、子どもたちの表現・鑑賞の体験は学校内にとどまることなく、幅広い人間関係や活動を通して総合的に深められるべきであると言えるだろう。その意味で学校、自治体、教育委員会、各種協会・財団など、これら諸団体が地域社会の中で連携しながら児童や青少年のための芸術文化教育を振興することは、今日的意義があり、すでに様々な場で実践されている。今日的意義とは、子どもたちの人格形成と関わる表現・コミュニケーションのあり方に展望を開くということである。

2．イタリアの舞台表現教育への視点　―音楽言語と関わって―

近年イタリアの学校で「舞台表現教育」（テアートロ教育）が、学校改革“autonomia”（アウトノミーア：自主・独立性、p.14 参照）の潮流にのって活発化している。イタリア語の“teatro”（テアートロ、舞台表現）は劇場、演劇、舞台を意味し、また朗読劇、芝居、舞踊、演奏、映画など、舞台で表現・上演されるものも対象として使われる。このテアートロの教育は、一般にイタリア語では“Educazione teatrale”と表記され、類似する語として Educazione al teatro（テアートロへの教育）、Educazione alla teatralità（テアートロ性への教育）などあるが、これらはあまり明確に区別されていない。むしろ人間形成という教育の目的においては、テアートロを実際の舞台に限定するのではなく、舞台の存在を、だれかが表現し、他のだれかがそれをみるという関係性から広く捉え、その関係性における表現実践のプロセスが教育活動として重視されている。本研究では舞台表現教育をプロフェッショナルな教育としてではなく、一般学校における教育活動として捉える。これらの点を確認した上で、「舞台表現教育」は原語を生かして以降「テアートロ教育」[2]とする。

さて、イタリアの公教育における音楽教育に目を向けると、その理念は、学習指導要領 i programmi ministeriali scolastici（小学校1985年版、中学校1979年版）に示されたように、音・音楽を言語形態 forma di linguaggio において捉え、その意味作用を感受と表現の活動に生かすという考え方に基盤を置いている。つまり、コミュニケーション活動を通して音・音楽の言語を習得・活用し、美的感性が磨かれることを目的としている。テアートロ（舞台表現）を同じ観点から捉えると、それは色彩や図形、声、ことば、身体、音・音楽など、種々の表現言語（バーヴァル，ノン・ヴァーバル）の共演によってスペッターコロ（spettacolo：見世物、舞台、舞台表現として実践されたもの）を生成する場であると言えるだろう。

イタリアは、コンメーディア・デッラルテ Commedia dell’arte やオペラをはじめとする各種舞台芸術を発展させてきた国である。筆者はこれまでイタリアの学校や劇場、町の様々な場で人々の表現活動に接してきたが、概してイタリア人の音楽表現は、演奏という単一の表現形態よりも、他の表現言語と関わってスペッターコロを形成する場において一層生かされると感じている。テアートロ教育の目的は、子どもたちの表現力や創造性を伸ばすことにあるが、その実践において音楽言語が他の表現言語と連関してどのように生かされるのか、この課題は前述の「場」の視点と関わって音楽表現のあり方に示唆を与えると考える。

本研究では、イタリアのテアートロ教育の創意が、イタリアの新しいカリキュラムの中でどう関連付けられるかを把握し、表現教育の理念をふまえたうえで、音楽に軸を置いた「音楽テアートロ」（Teatro Musicale，以降「テアートロ・ムジカーレ」）の実践論を検討する。そしてわが国の教育実践とも比較しながら，音楽表現の可能性について考察を進めていく。

3．研究内容

本研究は①情報収集、②文献研究、③現地調査、④研究成果発表・活用の4段階によって進めな

[2]わが国では「演劇教育」が一般的であるが、teatro の本質的な意味を伝えるために「テアートロ教育」を採用した。

がら、下記の点について明らかにする。

・2000年から施行されている「アウトノミーア autonomia」と呼ばれるイタリアの学校教育改革の動向と新しいカリキュラム、テアートロ教育との関係について
・テアートロ教育の経緯、理念、方法、実践内容
・テアートロ教育を推進するイタリアの学校、自治体、教育行政、各種機関・団体の連携の実態
・テアートロを構成する様々な表現言語と音楽言語（音楽表現）との関わり
・イタリアにおけるテアートロ教育の評価と課題
・わが国の学校教育、教員養成、表現教育の再検討

○調査に関連する機関・学校

・ロンバルディア州教育研究所（ANSAS : Nucleo territoriale della Lombardia-Agenzia Nazionale per lo Sviluppo dell'Autonomia, ex IRRE : Istituti Regionali di Ricerca Educativa、在、ミラノ市）
・文化協会「少年たちの舞台」Associazione Culturale "Un Palcoscenico per i Ragazzi"、イタリアテアートロ協会 ETI : Ente Teatrale Italiano、学校と社会におけるテアートロ文化振興と研究のための全国協会 AGITA : Associazione Nazionale per la Promozione e la Ricerca della Cultura Teatrale nella Scuola e nel Sociale, テアートロ研究センター CRT : Centro Ricerche Teatrali、他
・サクロ・クオーレ・カトリック大学ミラノ校教育科学部 Facoltà di Scienze della formazione : Università Cattolica del Sacro Cuore – Milano
・国立ミラノ・ビコッカ大学教育科学部 Facoltà di Scienze della formazione : Università degli Studi di Milano-Bicocca
・イタリア音楽教育協会 SIEM : Società Italiana per l'Educazione Musicale : SIEM
・ロンバルディア州ミラノ県第60学区の初等および中等学校

○本研究計画の基礎となる情報

（1）文献

・IRRSAE-Lombardia, (2001) *Il Teatro della Scuola,Riflessioni,indagini ed esperienze,*a cura di Rosa Di Rago, Franco Angeli, Milano.
・Perissinotto, L. (2003) *T*eatri a Scuola, UTET, Torino.
・AA.VV. (2003) *Musica in Scena,*a cura di Carlo Delfrati, EDT, Torino.

（2）主なインターネット情報

・（IRRE-Lombardia）http://www.irrelombardia.it/teatroscuola/
・（ETI）http://www.enteteatrale.it/
・（CRT）http://www.crteducazione.it/pages_crt/
・（ベルガモのプロジェクト） http://www.teatroscuola.org/esperienza_scuole.htm
・（Opera Domani のプロジェクト） http://www.operadomani.org/operadomani
・（トスカーナ州のプロジェクト） http://www.progettotrio.it/eduteatri/

Ⅱ　イタリアの学校におけるテアートロ教育の導入
―背景と理念―

１．学校教育とテアートロ表現

（１）テアートロ教育のはじまり

近代教育制度の変遷とともにイタリアの学校では、学習発表会や祝祭行事、またレクリエーションの一環としてテアートロ活動が行われてきた経緯がある（Benvenuti 1994, Perissinotto 2001）。また社会では1960年代から、マリオネットに代表される各種人形劇など、子ども向けの演劇活動や児童劇団の育成も行なわれた。これら動向の中で1970年代に「アニマツィオーネ・テアトラーレ Animazione Teatrale」（Benvenuti 1994, pp.163-184, Perissinotto 2001, pp.28-29）と呼ばれる動きが興り、テアートロ教育への関心が高まった。このアニマツィオーネ・テアトラーレは、舞台人を養成する専門的な教育とは一線を画し、社会的、文化的、教育的レベルにおいて子どもの舞台表現活動を基礎から発展させる新しい動きであった。これら創意は理論と実践を通してメソードを確立していったが、その実績は学校教育におけるテアートロ活動の振興に影響を与えた。[1]

（２）学習指導要領との関連　―1985年版小学校学習指導要領を例に―

テアートロ活動は公教育においてどのように認識されていたのかを、学習指導要領との関連から把握することができる。たとえば1985年版の前小学校学習指導要領 Programmi ministeriali scolastici では、次に示すように「イメージへの教育」「音と音楽への教育」「体育」（いずれも教科目名）の３教科でテアートロ表現との関連が読みとれる。

○「イメージへの教育」Educazione all’Immagine
・芸術作品のメッセージを感じ取り、美的感覚を養うために多様な文化芸術作品に親しむ：周囲の環境に存在するもの、彫刻、絵画、装飾、テアートロ、映画、パントマイム、ダンス、影絵芝居、指人形、マリオネット・・・
○「音と音楽への教育」Educazione al Suono e alla Musica
・生活と関わる様々な民族の音楽（宗教的儀式、家族の生活、労働、民衆の祭などの音楽）、テアートロ、映画、ダンスと関連する様々な時代・様式の音楽を聴く
・音楽分野や人間の多様な活動における声の様々な響きを探求する（演説、儀礼、演技、情報システムにおける声の活用）
・身振り手振り、舞踊など、テアートロの形態をともなった音楽を表現する
○「体育」Educazione Motoria
・身体的コミュニケーション、ドラマ性、音楽と動きが関わる運動能力を養う

上記からテアートロは、一つの表現形式のジャンルとして、鑑賞や演技、身体表現の観点から学

---

[1] Animazione Teatrale の主な活動家として、M. Lodi, R. Rostagno, F. Passatore, G. Scabia, M. Gagliardi, L. Perissinotto, F. Sanfilippo らの名が挙げられる（Benvenuti 1994）。

習内容として活用されるよう意図していることが読み取れる。しかし、この1985年小学校学習指導要領の段階では、テアートロ表現活動を基礎付ける理念とその指導実践への展開について十分に議論、認識されていなかったと言える。

2．新しい学校づくりとテアートロ教育推進の動向

（1）テアートロ教育推進の背景

イタリアの教育行政は1990年代に学校制度や教育内容に関する様々な問題に取り組んだが、その成果の一つとして、1997年の法律第59号[2]と1999年の大統領令第275号[3]によって、2000年９月から「アウトノミーア autonomia」（学校の自主自立の意）という語に象徴される教育改革がスタートした。このアウトノミーアは、各学校の実情に合ったカリキュラム編成と運営による特色ある学校づくりを推進するものであるが、この改革の鍵は、内外の支援を生かしながらいかに社会に開かれた学校として組織づくりできるかにあった。学校内の評議会をはじめ、教育行政、スポーツ・文化・芸術振興協会などが連携を図りながら、学校と学校を支援する地域の主体的な取り組みが求められた。

一方、1990年６月26日発令法律第162号[4]により、教育省が「健康教育 Educazione alla Salute」を全国の学校に推進する。この動きは＜プロジェクト若者93＞（Progetto Giovani 93）、＜プロジェクト少年2000＞（Progetto Rgazzi 2000）という名称の一連の教育活動として展開し、児童・青少年が置かれている社会・学校環境と心身の健康状態の改善が図られた。この動向は、文化・創造性の面で学校内外の教育活動を活発にしたが、中でも1995年と1997年に教育省とイタリア・テアートロ協会 Ente Teatrale Italiano（ETI）、そして大学との間で交わされた「テアートロ教育に関する議定書」は、テアートロ教育活動を大きく発展させた。これら議定書を基盤として学校、自治体、各種文化・芸術団体との組織的な連携によるテアートロ教育プロジェクトが活発化した。

（2）テアートロ教育を振興する２つの議定書

1995年の議定書「テアートロ教育に関する合意」と1997年の議定書「舞台芸術教科目に関する合意」では次のように述べられている（筆者抜粋）。

議定書＜テアートロ教育に関する合意＞（1995年）

Protocollo d’intesa relativa alla educazione teatrale（1995）

内閣府、舞台芸術局 Dipartimento dello spettacolo、教育省、イタリア・テアートロ協会

（IRRSAE Lombardia 2001, pp.209–210）

○趣旨

・ヴァーバル、ノン・ヴァーバルな言語と創造性の教育の機会を保障する学校が、人間形成の様々な要求に応える学習形態の一つとしてテアートロ教育を推進する。

・幼児期からの成長の過程において必要とされるテアートロ体験の、文化的水準の確保と組織化を

---

[2]Legge 1997, n.59, art.21

[3]D.P.R. 1999, n.275

[4]Legge 1990, n.162

進める。
・政府の「健康教育プロジェクト」と連関する多様なテアートロ活動を実践する。
・イタリアで実践されてきた児童・青少年のためのテアートロ活動の豊かな実績を、学校のラボラトリ活動 laboratorio[5]に生かす。
・イタリアのテアートロの伝統を享受し、新しい創造的価値を発展させる。
・学校教育とテアートロ専門の両方の立場が、教育という目的において合意し、継続的、組織的に連携する。
・舞台文化に対する若者たちの関心を促進させ、美的感性を育成する。

○取り組むべき課題
・各段階の学校教育プロジェクト Progetti Educativi d'Isitituto（PEI）の中にテアートロ活動を位置付け、児童・生徒がテアートロ教育を選択できるよう制度化する。
・児童や青年向けに上演されるテアートロの質を保証し、また若者が創出するテアートロ活動を中央と地方の行政が連携して支援していく。
・専門的な能力をそれぞれもっている学校とテアートロの両サイドにおいて、専門的なテアートロ教育の指導者を養成するため、研修制度や関連資料を整え、公演や実践発表などの交流の場を支援していく。
・人材や資金を合理的で効果的に活用するための組織を整える。

議定書＜舞台芸術教科目に関する合意＞（1997年）
Protocollo d'intesa per l'educazione alle discipiline dello spettacolo 1997
内閣府、舞台芸術局、教育省、大学・科学技術省
（IRRSAE Lombardia 2001, pp.211-213）

○趣旨
・情報化する文化社会に生きる若者たちは、日常生活において複雑なコミュニケーションの状況に置かれ、多様な言語に取り囲まれている。人格教育には、意味とともに言語の美的側面を把握し、批評的な態度を養い、情動に対する意識を育むことが求められる。
・表現や芸術の活動は人間形成の場を豊かにし、若者たちの心の問題と向き合うため意義ある機会を提供する。
・演劇、音楽、映画、ダンスなど、舞台文化に対して戦略的消費状況に置かれている若者世代に、舞台文化とマルチメディアの語法を教科目として専門的に学ばせる必要がある。

この1997年の議定書の趣旨は、おおむね1995年の議定書と重なるものであるが、以下の取り組むべき課題が示されたことに注目する。

○取り組むべき課題
・学校の児童生徒を対象とする活動に携わる舞台教育の専門家を養成し、舞台文化を教科目として教える教員を確保すること。

---

[5]イタリアの新しい学校カリュラムの中で注目される学習活動（p.43参照）。

・大学においては学位取得のための舞台文化専攻コースの充実化を図り、舞台文化教科目の教員養成を視野に入れること。
・地方の自治体ならびに教育行政、各種文化振興組織、各学校、大学が連携して、テアートロ教育推進のため、教師の研修に取り組むこと。また同様の体制において児童生徒、学生、教師が参加交流できるようテアートロ教育プロジェクトを組織し、支援していくこと。
・学校教師と舞台文化に関わる専門家など、人材が連携してテアートロ教育を推進できるよう支援体制をつくること。

1997年の議定書では、特に高等教育や教員養成に対して「学校でテアートロ教育に携わる専門家の育成」「大学における舞台文化専攻コース、舞台芸術科目の充実化」「大学、自治体、各種文化振興組織連携による教師の研修」「テアートロ教育プロジェクト支援のための体制づくり」など取り組むべき課題が示された。

２つの議定書は、次の５点（筆者まとめによる）においてテアートロ教育プロジェクトを方向付けている。
① テアートロ活動の教育的意義
② 学校の教育計画における位置付けと制度化
③ 専門的な指導者の養成と教員の研修
④ 学校とテアートロ、両組織の人的交流と協働体制の推進
⑤ 地域の各種機関連携による支援体制の確立

３．テアートロ教育の意義

（1）テアートロ教育を通して育成される能力

テアートロ教育推進の動きの中で、学校現場ではその活動の意義をどのように捉えられていたのであろうか。小学校教師リッカルダ・ヴィリーノ Riccarda Viglino は、テアートロ教育によって育成される能力について下記の５つの観点から説明している（Bricco 2001, pp.42-43）。

①情緒的、人間関係づくりの能力 Competenze affettive e relazionali
・感情的な発達、健康でバランスのとれた人格の形成、様々な学習形態の把握を促進させる。
・他者と自分との関係において多様な感動があることを知り、協働して活動し、社会的な態度を身につける。

②身体、動き、知覚の能力 Competenze corporee, motorie e percettive
・運動感覚的な様式を知り、活用する。
・目標とする働きに合致する方法で動き movimento を組織する。
・動きを通して表現する能力を修得する。
・ジェスチャーのコミュニケーション能力を養う。
・知性と運動の柔軟な関連を実感する。

③表現・コミュニケーション・創造の能力 Competenze espressive, comunicative e creative

・様々な表現言語 linguaggio を通して、その固有の体系 codice を学びながら表現しコミュニケーションできる。
・ことば、身体、音、ジェスチャーなど、多様な表現言語を統合しながら表現内容 messaggio を把握し、つくり出し、対照させることができる。
・思い、感動、体験を伝えるために言語で表現し、イメージする状況や世界を創り出し、発案を実現させるために、他者と行動を触発しあい、そこに現実的経験を反映させることができる。
・意識的に声の様々な調子 registro（声区）を使い分けることができる。
・創造的、表現的機能をもつ言語を活用する。
・あそび、創造、言語の活動を通して語彙を増やす。
・コミュニケーションの場やその活動を通して他者の考えを尊重し、受け入れる。

④認知的能力 Competenze cognitive

・観察・分析、問題の設定・解決、関係性の把握ができる。
・様相、状況、事象の分析を通して考え、推測し、評価することができる。
・シンボリックな言語を組み立て活用することができる。
・情報を集め、精選することができる。
・空間、時間、身体を連動させながら知覚し、表現することができる。
・効果的な手順を通してそれぞれの能力や知識を活用することができる。

⑤歴史・文化理解の能力 Competenze storico-culturali

・伝統的な文化遺産や歴史の中で人間が生み出してきた作品と関わることができる。
・周囲の文化的な環境を理解することができる。
・現代の多様な文化を理解することができる。

ここに挙げられた５つの能力「情緒的、人間関係づくり」「身体、動き、知覚」「表現・コミュニケーション・創造」「認知」「歴史・文化理解」は、イタリアの学校におけるテアートロ教育のあるべき方向を示していると解釈する。

（2）M. ブリッコ M. Bricco の指導理念と方法（Bricco 2001, pp.10–29）

さらにテアートロ教育の実践について把握するために、M. ブリッコ M. Bricco のテアートロ教育の指導観点（A）と発達段階に沿った指導計画（B）の例を次に示す。ブリッコは舞台人として豊富な経験をもっているが、舞台の専門家と学校教育における実践者の両方の立場からテアートロ教育の指導方法やカリキュラムを提案している。

A．テアートロ教育の10観点

①関係づくり Strategia relazione

テアートロは現実とは異なるもう一つの場でのコミュニケーションである。

ⅰ）向かい合う場 spazio del confronto

ⅱ）ニュートラルな場 spazio neutrale

ⅲ）交流の場 spazio dell’incontro

②遊戯性 Ludicità

あそびはフィクションの表現につながり、あそびの中にテアートロの構成要素が含まれている。あそびを通して楽しんで表現方法、知識を修得していく。

③巻き込み Coinvolgimento

巻き込みとは、人が表現するように働きかけられる状況。あそびの生きた経験を通して楽しみ、感動をともないながら心と体から表現する。

④参加意識 Appartenenza

その場にいて自分がその役割をする（表現する）という意識。

⑤集団意識 Comunità

皆で協働して活動するという意識。

⑥どのクラスにも舞台はある In ogni classe c’è un teatro

学校生活の中で子どもたちがあそびながらテアートロしている。

⑦舞台（テアートロ）の視点をもって Con gli occhi del teatro

舞台の視点をもってみると、日常生活のできごとに対する関心、見方、振るまいが変わってくる。実在するもの、しぐさ、ことば、態度、状況は表現を創造する題材になる。また子どもは日頃からフィクションを演じ、そこから学んでいる。

⑧表現言語 Linguaggio

表現形態をもつもの（verbale, non-verbale）はすべて言語 Linguaggio と解される。テアートロ表現には固有の特徴や法則 regole をもった言語が総合されている。子どもは表現の方法、空間、ドラマの構想を試行、経験しながら意識的に表現の法則を修得していく。言語は子どもに表現したい内容があってはじめて修得されることを忘れてはならない。つまりコミュニケーションの過程で言語は修得される。

⑨意識的な演者 Attore consapevole

人に見てもらうことを意識して演じる。

⑩上演 Spettacolo

組織された発表の場で上演する。

Ｂ．指導計画に生かされる表現の２段階

①テアートロであそぶ Giocare al Teatro（幼稚園、小学校１・２年）

舞台表現を意識するために主体的に表現してあそぶ。

ⅰ）テアートロであそぶ１（あそびとしての舞台表現，フィクションを表現する giocare）

・３歳：あそびながら表現する

・４歳：実在するものを表現する

・５歳：感情を表現する

ⅱ）テアートロであそぶ２（「する」「みる」の両側からフィクションを表現する）

・小学校１年：テアートロの探索者

２年：見せかける，まねをする

② テアートロを演じる Fare Teatro（小学校３・４・5年）

テアートロ表現の方法 grammatica を知り、経験することを通して、そのメカニズムを分析的に捉える。

ⅰ）テアートロ（舞台表現）をする１（演者の表現：人物描写の解釈を通して表現する）
　　・小学校３年：ジェスチャー表現と空間
　　４年：呼吸と声
ⅱ）テアートロ（舞台表現）をする２（劇あそび gioco drammaturgico：人物描写，表現のメカニズム，ストーリーを発案する・話す・表現する）
　　・小学校５年：人物描写とストーリー

幼稚園、小学校１・２年の「①テアートロであそぶ Giocare al Teatro」という文言は、小学校３～５年では「②テアートロを演じる Fare Teatro」（小学校３・４・５年）というように発達段階に即して「あそぶ giocare ⇒ 演じる fare」に変化している。どちらの段階でも「あそび」は、子どものテアートロ表現のキーワードとして注目される（pp.60-61参照）。

以下、ブリッコ著の『テアートロ活動のアルファベット』ALFABETO TEATRO で提案されている小学校児童（１～５年）を対象としたテアートロ活動計画（筆者による抜粋・要約）を参考資料として示しておく（Bricco 2001, pp.125-287）。

M. ブリッコ＜ALFABETO TEATRO＞の指導計画

小学１年　舞台表現を試行する探検

１．テアートロ（舞台）を準備する：半円形になる
２．テアートロを準備する：椅子を使って半円形になる
３．テアートロで自分を知り表現する：あいさつ
４．テアートロで自分を知り表現する：ともだちになる
５．テアートロで自分を知り表現する：いっしょに活動する
６．テアートロの探索：元気に，注意して，興味をもって
７．テアートロの探索：自分のまわりをみることができる
８．テアートロの探索：実態 realtà を明らかにする
９．テアートロで日常を表現する：冒険的な朝
10．テアートロで日常を表現する：とんでもない午後
11．テアートロで日常を表現する：おそろしい夕暮れ
12．子どもたちのテアートロ（指の表現）：やんちゃな男の子
13．子どもたちのテアートロ（指の表現）：やんちゃな男の子と彼のお話
14．子どもたちのテアートロ（指の表現）：物語を完成させる・深める
15．子どもたちのテアートロ：最終発表会：やんちゃな男の子の物語

小学２年　ふりをする・まねをする

１．イメージして表現する：ふりをする
２．指の表現：やんちゃな男の子

３．物体でイメージを表現 fare immaginare する：ペンと椅子のふりをする
４．物体でイメージを表現する：みんなでふりをする
５．物体に命をあたえる：机を舞台として
６．物体に命をあたえる：えんぴつとペンとマジックペンの物語
７．他の材料で空想する：紙、ボール紙、箱、布など
８．テアートロの小さな歴史１：日常生活の中にテアートロはある
９．彫刻家と仲間たち：物体の像
10．物体になる：身体を使って物体になる
11．物体になる：物体が動く様
12．子どもたちのテアートロ：命をあたえられた物体たち
13．子どもたちのテアートロ：命をあたえられた物体たちとその物語
14．子どもたちのテアートロ：物語を完成させる・深める
15．子どもたちのテアートロ（最終発表会）命をあたえられた物体たちの物語

小学３年　ジェスチャーと空間

１．物体を使ってイメージを表現する：複雑な物たちのふりをする
２．物体になる：命をあたえられた物体たちの別の物語
３．彫刻家と仲間たち：人物の形
４．身体を使ってイメージを表現する：ジェスチャー
５．身体を使ってイメージを表現する：変な顔
６．身体を使ってイメージを表現する：ことばを使わないで
７．テアートロの小さな歴史２：ギリシャ人とローマ人のテアートロ
８．身体を使ってイメージを表現する：登場人物
９．身体を使ってイメージを表現する：登場人物のカード
10．みせる場・空間：実践と様々な試行
11．みせる場・空間：コマをつなげて表現する
12．みせる場・空間（写真のテアトロ）：写真で物語を表現する
13．子どもたちのテアートロ（写真のテアートロ）：物語を完成させる・深める
14．子どもたちのテアートロ（写真のテアートロ）：物語の最終ヴァージョン
15．子どもたちのテアートロ（最終発表会）：写真で物語る

小学校４年　呼吸と声

１．身体でイメージを表現する：人物を表現する
２．身体を使って語る：写真テアートロの別の物語
３．呼吸：うまく息を吸うためのあそび
４．呼吸：表情をつけて息を吸う
５．声でイメージを表現する：声は響く
６．声でイメージを表現する：声と物音
７．声でイメージを表現する：ことばと音声，ことばの響き
８．声：うまく話すためのあそび

9．テアートロの小さな歴史３：中世とルネッサンスのテアートロ
10．人物と声：響き
11．人物と声：人物のカード
12．子どもたちのテアートロ（ラジオドラマ）：一人の声で物語を表現する
13．子どもたちのテアートロ（ラジオドラマ）：物語を完成させる・深める
14．子どもたちのテアートロ（ラジオドラマ）：物語の最終ヴァージョン
15．子どもたちのテアートロ（最終発表会）：ラジオドラマの物語

小学５年　登場人物と物語

1．声でイメージを表現する：声で人物を表現する
2．声で語る：ラジオドラマのための別の物語
3．テアートロのために物語をつくる：人物のカード
4．テアートロのために物語をつくる：題目のカード
5．テアートロのために物語をつくる：場面のカードと人物のカード
6．テアートロのために物語をつくる：わらいと恐れのメカニズム
7．テアートロのために物語をつくる：始まりのカードと終わりのカード
8．テアートロのために物語をつくる：場面設定
9．テアートロの小さな歴史４：17世紀～ 20世紀
10．状況が私たちに何かを語る：周囲を見ながら物語をつくる
11．状況が私たちに現れる：物語をつくるためのいくつかの示唆
12．子どもたちのテアートロ（語りの劇場）：物語をつくる
13．子どもたちのテアートロ（語りの劇場）：物語を完成させる・深める
14．子どもたちのテアートロ（語りの劇場）：物語の最終ヴァージョン
15．子どもたちのテアートロ（最終発表会）：ナレーターを使った語り

Ⅲ　テアートロ教育の指導者養成

先述のようにテアートロ教育振興に関する議定書（1995・1997年）と2000年から始まった学校のアウトノミーアの動向は、教育現場においてテアートロ活動への認識を高めたが、そのことは同時にテアートロ教育を実践できる教員の確保・育成をどう進めるかという課題に直面することになった。各自治体の教育行政や研究機関は、テアートロ教育指導者養成のために研修会や情報提供を推進し、一方、教員養成課程を有する大学ではテアートロ教育関連科目をカリキュラムに取り入れるようになった。

１．ロンバルディア州教育研究所 Nucleo territoriale della Lombardia–Agenzia Nazionale per lo Sviluppo dell'Autonomia Scolastica : ANSAS（ex IRRE Lombardia）[1]

イタリアの教育行政は州、県、市町村単位でそれぞれ行なわれているが、これらとは別に、各州に研究や研修を目的とした行政機関が設けられている。ロンバルディア州教育研究所（在、ミラノ）は主要な活動の一つとして、1999年から州内の学校におけるテアートロ教育の実践状況について調査・研究し、テアートロ教育推進プロジェクトを立ち上げた。州の各地域において、学校、教師、自治体、文化振興組織、劇場の専門家などが交流・連携した活動を助成し、教員のための研修、指導者の養成に力を注いでいる。下記はテアートロ教育プロジェクトを指揮するR.ディ・ラーゴ R. Di Rago研究員が編集した刊行書とプロジェクトのサイトである。州内のテアートロ教育推進の動向と研究成果について知ることができる。

（刊行書）

IRRSAE-Lombardia (2001), *Il Teatro della Scuola,Riflessioni, indagini ed esperienze*, FrancoAngeli, Milano.

IRRE-Lombardia (2008), *Emozionalità e Teatro, Di pancia, di cuore, di testa*, FrancoAngeli, Milano.

IRRE-Lombardia (2009), *Teatro, Didattica Attiva, intercultura – Teatri visibili e teatri invisivili,* FrancoAngeli, Milano.

（インターネット・サイト）

http://www.irre.lombardia.it/teatroscuola/

---

[1] ロンバルディア州教育研究所はIsitituti Regionali per la Ricerca, la Sperimentazione, e l'Aggiornamento:IRRSAE Lombardiaとして1979年に設立、2001年にIstituti Regionali di Ricerca Educativa:IRRE Lombardiaと改称、さらに2008年からNucleo territoriale della Lombardia-Agenzia Nazionale per lo Sviluppo dell'Autonomia Scolastica（通称ex IRRE）となった。

ロンバルディア州教育研究所

ディ・ラーゴ R. Di Rago 研究員（中央）、メローニ G. Meroni 所長（右）

2．サクロ・クオーレ・カトリック大学 Università Cattolica del Sacro Cuore の取り組み

2009年３月と同10月、 教員養成課程をもつサクロ・ クオーレ・ カトリック大学 Università Cattolica del Sacro Cuore[2] ミラノ校の教育科学部の授業を視察した。その中からテアートロ教育活動と関わる「ドラマトゥルギー」の授業と、テアートロ教育指導者養成を目的とするマスターコースのカリキュラム（2008-9年度）および実践活動について取り上げる。

（1）ドラマトゥルギー Drammaturgia

・授業者：G. オリーヴァ教授 prof. G. Oliva
・科目名：ドラマトゥルギー（ドラマ作法）

この授業では40名ほどの学生が６、７名単位のグループに分かれ、机を囲んで着席して活動する。授業のはじめに「あひる anatra」という言葉が提示され、学生は頭に思い浮かんだ内容を文字で表したりする。筆者が参加したことがきっかけで TOKIO（東京）という文字が示され、学生はＴ・Ｏ・Ｋ・Ｉ・Ｏの５文字を頭文字とすることばを次々に挙げていく。続いて「木 albero」と「ラウラ Laura」（女の子の名前）という２つの単語からイメージした内容を表現していく...。これらの活動は、はじめは単語を羅列することから始まるが、その後段階的に文章、詩、物語の創作へと進展し、即興的なドラマ創作力が求められていた。この授業活動の展開は次のようにまとめられる。

ことば parola → 文 frase → 詩 poesia → 物語 racconto
→ 脚本 canovaccio → ドラマ・劇 dramma

授業の中でオリーヴァ教授が学生の創作意欲を喚起するために何度も繰り返した「想像力 immaginazione」と「ファンタジー fantasia」の2語は、創作活動のキーワードであると印象付けられた。この授業で見た「ドラマトゥルギー」の活動は、テアートロ教育の重要な柱の一つであると認識した。

---

[2] Milano, Piacenza e Cremona, Brescia, Roma, Campobasso の５つの都市・地域で開校。医学、心理学、経済、経営、教育科学（教員養成）などの学部をもっている。

「ドラマトゥルギー」の授業風景

G. オリーヴァ教授（中央）と助手のマルコ（左）

3．マスターコース＜テアートロ教育―自分自身をよく知ること＞

Corso di perfezionamento “Educazione alla Teatralità—Consapevolezza del sé”[3]

（授業概要抜粋）

①コースの目的と趣旨

「学校や社会活動においてテアートロ教育に携わる指導者の養成」

急激に変化する社会にいる我々は、様々な状況において創造的な解決法をみつけてその変化に対応し、多様な言語を使ってコミュニケーションすることが求められている。子どもも大人も、学ぶ者が自分自身をよく知り、行動し、適応しながら他者との関係を育んでいく、そのような場を支援する人材の育成が求められている。

この目的を実現する方法の一つがテアートロである。テアートロは創造性と表現力を育て、ノン・ヴァーバルな言語を活用しながらヴァーバルな言語の修得を助け、固有の技能や方法を通して注意力や集中力、シンボリックなコミュニケーション能力を促進させる。

このコースでは、テアートロ教育に関わる知識理論と活動の能力を修得するためカリキュラムが編成されており、その内容は様々な段階の学校教育、社会教育、障害者支援に役立てられるものである。

②履修内容

・表現 rappresentazione とその活動力 dinamica
・コミュニケーションとしてのテアートロ il teatro come comunicazione
・社会・教育・文化の領域におけるテアートロ教育実践のための教育心理学
・学校・社会におけるテアートロ教育プロジェクト
・あそびの活動 l’attività ludica

---

[3] 同コース2008-9年度授業概要（冊子）：EDUCAZIONE ALLA TEATRALITÀ－LA CONSAPEVOLEZZA DEL SÉ, Corso di perfezionamento, Università Cattolica del Sacro Cuore; Facoltà di Scienze della formazione, Anno Accademico 2008/2009

・創造的表現を引き出すための技術
・様々な表現方法を活用した舞台表現 azione scenica の構成
・身体表現、演技、人物描写を演出する舞台装置・道具、音楽、照明の創作と活用

③授業方法（メソード）
・ヴァーバル、ノン・ヴァーバルな言語を修得しながら表現能力を伸ばす
・各人の潜在能力、協働作業、コミュニケーションを生かして新しい表現力を引き出す
・演劇や場面設定を生み出すアイデアや作品を、視覚的・聴覚的要素、音、文字によって構成する
・舞台装置についての知識とその実践的運用
・テアートロ教育の実習と評価

④履修時間
・理論と実践による授業：112時間
・指導計画作成と実習：20時間
・コンピューターによる学習（On-line）：20時間

⑤授業計画
○テアートロのコミュニケーション LA COMUNICAZIONE TEATRALE
第１課程：テアートロ教育　［講義］
第２課程：ノン・ヴァーバルな言語（ジェスチャーから創造的な動きへ）[講義・演習]
第３課程：ヴァーバルな言語（音・音声からことばへ）［講義］
第４課程：創造的記述（ことばから舞台作品へ）［講義・演習］
第５課程：素材の組み合わせ（物体から場面へ）［講義・演習］
第６課程：舞踊教育と動きによるノン・ヴァーバルなコミュニケーションの理論とテクニック［講義］
○心理学的・教育学的アプローチ ORIENTAMENTI PSCICO-PEDAGOGICI
第７課程：発達段階とテアートロ教育　［講義・演習］
第８課程：舞台表現と連動する社会的背景　［講義］
第９課程：コミュニケーションとテアートロ教育［講義］
第10課程：イベント evento の組織　［講義・演習］
第11課程：オン・ライン活用［講義］

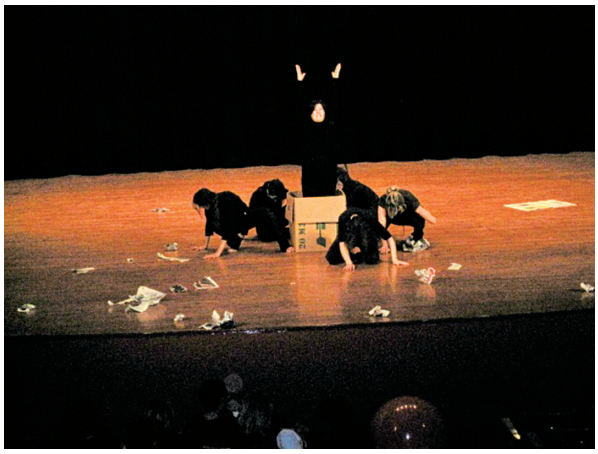
筆者は、オリーヴァ教授が担当する第2課程と第10課程の授業を参観した。第2課程「ノン・ヴァーバルな言語」（ジェスチャーから創造的な動きへ）では、テアートロ教育の理念についての１時間の講義が行われた後、20名ほどの受講生はレオタードに着替え、身体の動きを静と動、テンポの緩急の中で自在にコントロールする活動に取り組んだ。その中でも白い仮面 maschera neutra を被り、二人ペアで相手の動きを模倣し、連動して動く活動は興味深かった。集中力、筋力、持続力、バランス感覚を身体に養わせることは、身体表現を中心に置くテアートロ表現の基礎づくりになると理解した。

第10課程「イベントの組織」の授業はミラノ郊外の Abbiate Guazzoni 市の劇場で行われ、40名

ほどの受講生はグループに分かれて、試行を重ねてきた創作表現を発表した。身体、声、語り、音、種々のマテリアル（素材：絵具、段ボール箱…）、小道具（箒、鍋、ボール…）、楽器（サックス、フルート、アコーディオン、タンバリン…）、歌など、各グループは様々な要素を組み合わせて独創性を表現したが、題材、内容、構成など、表現のコンセプトがグループ内でよく共有されているという印象を持った。発表後、各グループの評価についてオリーヴァ教授と受講生たちは活発に討論していた。

筆者が参観したこの２つの授業の受講生の約８割は、教員や特別支援などの教職関係者で、残りは福祉・医療関係、俳優や学生であった。このコースの授業概要から、テアートロ教育指導の方向性を読み取ることができるだろう。

マスターコースの授業風景



マスターコース受講生の発表風景（Abbiate Guazzoni 市劇場にて）

マスターコース受講生の発表風景（Abbiate Guazzoni 市劇場にて）

同左

[4] オリーヴァ教授はこの活動に、ポーランドのグロトフスキー Grotowski.J.（1933- ）のメソードを取り入れている。

同

同

同

テアートロ研究センター研修の様子（Olona 市）

Ⅳ　ミラノ県第60学区の取り組み

１．文化協会「少年たちの舞台」
Associazione Culturale “Un Palcoscenico per i Ragazzi”

文化協会「少年たちの舞台」は、ミラノ県東部にある第60学区[1]のテアートロ教育推進のために自治体の支援の下、同学区学校教師たちによって1987年に設立された（代表 prof.ssa B. Cerreda）。毎年、小中学校、高校の児童生徒が中心に参加するフェスティバルが開催される。「ラッセーニャ Rassegna」[2]と呼ばれるテアートロ教育プロジェクトのフェスティバルは、2001年の報告によるとイタリア全国で100を数える（MPI et. al. 2001）。この「少年たちの舞台」のフェスティバルは「学校と社会における全国テアートロ文化振興・研究協会」（AGITA:Associazione Nazionale per la promozione e la ricerca della cultura teatrale nella scuola e nel sociale）、「テアートロ・学校フェスティバル振興会」（Co. Ra:Coordinamento Rassegne teatro scuola）、「ロンバルディア州教育研究所」（ANSAS）の後援により開催され、筆者は2009年第22回大会を参観した。

（1）活動方針[3]

・人格と美的感性を育て、様々な経験領域を統合するための教育実践を提案する。
・フェスティバルに参加する教師たちの交流を通して、子どもたちの生活や心身の向上、異なる文化や民族への理解、それらを推進できるよう教師たちを支援する。そのために教育とテアートロの専門家の協力を要請し、セミナーを開催する。
・学校間の交流が発表の場だけではなく、研究や指導法の面でも促進されるよう支援する。
・子どもや若者たちの文化を評価し、彼らが考えを自由に伝えることができ、主体となって活動できるよう支援する。
・社会文化、心身の面で差別のない教育の機会を実現する。

この活動方針はフェスティバルの性格を特徴付けている。フェスティバルが単なる成果発表のイベントではなく、学校、子ども、教師らが交流し、表現と創造の体験を通して、他者、社会、文化について豊かな視野を養い、人間的に成長することを目指している。

（2）大会の概況

①第21回大会の参加状況
・開催期間：2008年５月９日～30日
・演目数：50
・参加人数：児童生徒1255人（小学生685人、中学生330人、高校生170人、その他70人）、

---

[1] この学区は小規模な29の市町村（Vimercate ほか）から構成される。29市町村の総人口は195,000人である。各市町村に開校されている初等・中等学校の数も各１～２校程度である。
[2] Rassegna：展覧会、展示会、コンクール、フェスティヴァルの意。
[3] 文化協会「少年たちの舞台」2008年度、2009年度報告書

教師99人、俳優・演出家・劇場関係者など31人

②第22回大会の参加状況と様子

・開催期間：2009年５月８日～29日

・ 開催場所：10の市町村11の会場（劇場、映画館、体育館など）[4]

・演目数：55

・参加人数：児童生徒1050人（小学生602人、中学生305人、高校生133 人、その他10人）、教師62人、 俳優・ 演出家・ 劇場関係者など22人

筆者は2009年５月16日～25日の間、４つの会場で14の公演をみたが、オーケストラ演奏、ミュージカル、演劇、学習発表形式によるものなど、演目のジャンルは様々あった。特に高校の社会問題を扱った演劇やコメディーは、洗練された表現をみせた。その中で筆者は、「劇あそび」（pp.60-61参照）の要素を取り入れた小学校の舞台に注目した。

「少年たちの舞台」第22回大会ポスター

○コンコレッツォ市ドン・ニョッキ小学校 ３年Ｆ組『遊んだことのないあそび』GIOCHI MAI GIOCATI

劇の冒頭、子どもたちはパソコンに向かって座り、夢中で遊んでいるが、昔の子どものあそびの世界にアクセスする。舞台背景に絵画（ブリューゲル作『子どもと遊戯』）が映し出され、現代の子どもたちは今まで経験をしたことのないあそびの世界へと引き込まれていく。そしてドラム缶や廃材、大輪（フープ）、マントなどを使って夢中に遊んだりダンスをしたりするが、その中で各自が自分のあそびの体験を語る。そして皆で様々なアイデアを出し合って新たなあそびへと進んでいく。音楽がBGMとして場面づくりに効果的に使われ、子どもの身体能力が生かされて、自然な流れの中でドラマは進行する。（写真１～４）

[4] Mezzago, Bellusco, Usmate, Usmate Velate, Ornago, Concorezzo, Vimercate, Villasanta, Sulbiate, Oreno の各市町村

写真１　コンコレッツォ市ドン・ニョッキ小学校
３年Ｆ組『遊んだことのないあそび』

写真２　同左

写真３　同上

写真４　同カーテンコール

○コンコレッツォ市ドン・ニョッキ小学校 ４年Ｈ組『ÀTREBIL の島』ISOLA DI ÀTREBIL

子どもたちの乗った船が遭難し、ÀTREBIL という島に漂着する。子どもたちはその島で様々な苦難を経験しながら、生きるために大切なものは何かを探し求めていく。そして ÀTREBIL という島の名前は、逆から読むと LIBERTÀ（自由）であることに気づく。大人が失った子どもの自由な生き方を問い直した作品である。この劇の中でも木切れでフェンシングをまねたり、幅広のビニールシートを使って荒波を表現したり、また床運動の動きなども取り入れられていた。同じ小学校の３年Ｆ組の演技に比べると、同様にあそびの要素を取り入れながらもう１段階磨かれた身体表現や演技の変化が見られた。どちらのクラスも子どもたちが思い描いた世界で、生き生きと身体やことばを活用して表現するという雰囲気は共通していた。（写真５～８）

写真５　コンコレッツォ市ドン・ニョッキ小学校
４年Ｈ組『ÀTREBIL の島』

写真６　同左

写真７　同上

写真８　同上

このフェスティバルの演目のほとんどは、朝・昼と夜の２回公演の形をとっていた。朝・昼の部には、教師たちに引率された児童生徒が観客として参加し、夜の部は保護者に向けて上演されていた。いずれの公演でも終演後出演した子どもたちは舞台前方に座り、観客と交流する。劇中の場面や演技、演出や解釈について観客の子どもたちから質問や意見が出され、出演した子どもたちはそれぞれ答えていく（写真９）。「ラッセーニャ Rassegna」と呼ばれるイタリアのテアートロ教育フェスティバルは、この交流の時間が持たれることを特徴としている。

写真９　終演後、客席からの質問に答える出演した子どもたち（コンコレッツォ市　サン・ルイージ劇場）

2．小中学校におけるテアートロ教育の実践

（1）小・中学校カリキュラムにおけるテアートロ教育の位置付け

義務教育のカリキュラムの中でテアートロ教育はどのように位置付けられているかを、ミラノ県第60学区にある小学校と中学校の時間割から把握する。

ミラノ県コンコレッツォ市 ドン・ニョッキ **Don Gnocchi** 小学校３年Ｆ組 授業時間割 **2008 -9** 年度

	月　曜	火　曜	水　曜	木　曜	金　曜
8：30～9：30	*1ともに学ぼう 歴　史	*1ともに学ぼう 歴　史	体　育	*1ともに学ぼう 算　数	*1ともに学ぼう イタリア語
9：30～10：30	歴　史	算　数	イタリア語	算　数	イタリア語
10：30～11：30	宗　教	理科／情報	イタリア語	理　科	*3テアートロ・ラボラトリ
11：30～12：30	宗　教	理科／情報	イタリア語	理　科	*3テアートロ・ラボラトリ
12：30～ 14：30	給　食 あそび	給　食 あそび	給　食 あそび	給　食 あそび	給　食 あそび
14：30～15：30	算　数	英　語	*2表現ラボラトリ	読　書	地　理
15：30～16：30	算　数	英　語	*2表現ラボラトリ	イタリア語	算　数

*1授業名 Accoglienza：歓迎の意。重度の障害児との活動
*2授業名 Laboratori Espressivi：オープンクラス。音楽、図画、工作、モザイク、版画、粘土、人形芝居、ダンスなどの活動
*3授業名 Laboraorio Teatrale：このラボラトリ名はクラスによって異なる。このクラスの場合はテアートロ活動を行う。

ミラノ県オレーノ市 ドン・ゼノ **Don Zeno** 中学校1年Ｆ組授業時間割 **2008 -9** 年度前期

（９月８日～１月31日）

	月　曜	火　曜	水　曜	木　曜	金　曜
8：00～8：55	*1技術	*1技術	イタリア語	スペイン語	*2地理 - 英語
8：55～9：50	体　育	宗　教	イタリア語	スペイン語	*2地理 - 英語
9：50～10：55	体　育	科　学	イタリア語	数　学	美　術
10：55～11：50	数　学	数　学	数　学	英　語	美　術
11：50～12：45	科　学	イタリア語	音　楽	イタリア語	歴　史
12：45～13：35	歴　史	英　語	音　楽	イタリア語	地　理
	昼　食		昼　食		
14：30～	*3ラボラトリ		*3ラボラトリ		
16：10	*3ラボラトリ		*3ラボラトリ		

*1授業名 Tecnologia
*2授業名 Geo/English：地理と英語の合科目
*3授業名 Laboratorio：新聞、情報、ダンス、テアートロなど選択制

小学校中学校ともに、「ラボラトリ Laboratorio」（P.43参照）と呼ばれる教科の枠を越えた特色ある授業時間が設けられている。小学校の場合、「表現ラボラトリ」という時間に音楽、図画工作、ダンスなど、創作や表現と関わる活動が行われている。ドン・ニョッキ小学校3年Ｆ組の場合、この「表現ラボラトリ」とは別に「テアートロ・ラボラトリ」の時間が組まれている。これは、このクラスの担任ペナーティ C. Penati 教諭が学校の評議会に要望を出し、承認されて実践している授業である。承認にあたっては教師の指導力と経験が問われるが、ペナーティ教諭は研修会に参加するなど研鑽を積み、20年以上テアートロ教育を実践している。

中学校のラボラトリは選択性で、その中でテアートロ活動が計画されている。またドン・ゼノ中学校1年Ｆ組の場合、時間割に示された「Geo ／ English」は地理と英語の合科目であるが、この授業でもテアートロ表現が取り入れられ、地理と英語両方の学習内容に生かされていた。

（2）ドン・ニョッキ小学校におけるペナーティとヴァレーラの実践（2004-5年度の指導計画・記録より）[5]

コンコレッツオ市のドン・ニョッキ小学校は、テアートロ教育に熱心に取り組む学校の一つである。2009年５月の「少年たちの舞台」フェスティバルに、全校10クラス中３クラスが参加している。この小学校でテアートロ教育を担当する二人の女性教師、ペナーティ C. Penati. とヴァレーラ A. Valera. の指導計画・記録（2004-5年度）の内容から指導方法を捉える。

A. テアートロ活動の理念と指針（筆者要約）

①　話し方を獲得する Recupero dell’oralità

テアートロ活動をすることは話し方を身につけることであり、コミュニケーションの基盤となることばの働きを学ぶことになる。話し方は全身を使い、社会性や情操と関わって、経験から組織される記憶を再認識する。テアートロ教育においては、話し方によってエピソード、物語、詩などの言語表現が磨かれる。

②　物語ることと教育 Narrazione ed educazione

テアートロ表現の基本は物語る経験である。情報優位、大衆文化の影響下にあって、語り方や聞き方を学ぶことはますます大切である。学校は、論理や知識だけを教える場ではなく、物語の思考力に関心を示し、子どもたちが他者と柔軟な関係を築き、開かれた自己を形成できるよう、語り合う共同体とならなければならない。テアートロに参加することにより、子どもたちは自分を語ることを学ぶ。テアートロは語ったり聞いたりする欲求を引き出し、その相互経験の場と時間である。

③　儀式性 La ritualità

集団行動においてテアートロの儀式的性格は大切な役割をもち、集団の一員として常に自己成長を促し、それが子どもたちには社会性と関わる経験となる。テアートロの視点から、我々の存在はシンボリックな形として、また学校という空間はシンボリックな行動の場として把握される。

④　テアートロのあそびの性質 La dimensione ludica del teatro

テアートロ活動は私たちを遊戯の次元に導き、あそびの活動力を認識させる。あそびはイメージとシンボルを通して思考力を育て、情動的経験を深める。あそびに基づいたテアートロ活動は、身体からはじまる創造的体験である。

---

[5] この授業実践はロンバルディア州研究所の助成を受けている。

⑤　芸術教育の価値 **Il valore formativo delle arti**

学校にテアートロ活動を取り入れることは芸術性と触れることになり、全人教育における芸術の価値を認識させるだろう。そして認知的な要素と情緒的な要素は、個人やグループの体験を通して、教育という目的において一つにまとまる。

⑥　**協働性 La cooperazione**

テアートロ活動はグループに役割分担・協働一致の行動を促進させ、グループ活動は社会性を身につけさせる。また、この活動において学習を進めるのは子どもたち自身である。子どもたちは互いに助け合い、意見交換し、学びあいながら社会的に成長する。

B. プロジェクト＜テアートロ教育＞　３年Ｆ組

（テアートロ・ラボラトリの授業を中心とする活動に１年間クラスで取り組む）

①　**目標**

ドラマ表現であるテアートロ活動を通して、認知、情緒、感覚、運動、美的感性と関わる幅広い学習の可能性を追求する。

②　**活動内容**

・グループ活動の意味を知る
・身体を感じる（呼吸、リラックス・緊張、形状を表現する体）
・他者の表現を積極的に聞く
・時間と空間の連関性に反応する
・身体の表現・伝達の方法を、空間やリズムとの関係において知覚する
・自己と他者の関係において情動 le emozioni や感情 i sentimenti を認識する
・集中力と自制心を養う
・楽しんで自分の体験や想像したことを話す
・想像力と創造力を伸ばす
・テアートロの表現方法から有用な技能を身につける

C. ドラマづくりの工程

【第１段階】

子どもたちが即興的に話し、表現したこと、物語や詩、動きやジェスチャーなど、また子どもたちが興味を持った音楽や画像などを収集する。

【第２段階】

第1段階で収集したものの中から、クラスにとってより意味のある題材を選んでいく。それらは子どもたち一人ひとりがイメージしやすい内容のもので、シンボリックで情動的な性質をもつものである。題材の内容はより明確になるよう修正されていくが、この段階において子どもたちは作り手と受け手の立場になって、効果的に伝わる表現になるよう試行する。

【第３段階】

上演用の筋書きを決定する。そして台本が詳細に作られていく。このとき教師は、全員が主人公になって台詞が言えるように、子どもたちをストーリーの中に統合していく。

【第４段階】

本番の舞台に向けて劇全体を練習する。その中で、障害をもつ子どもがどのように参加できるか

を考え、子どもたちは表現内容や動きを工夫していく。

ペナーティとヴァレーラの指導法は、一貫して認知と表現の関係を「身体」（ノン・ヴァーベル）と「ことば」（ヴァーバル）の２方向から捉え、「身体反応・表現」と「ドラマづくり」の２つの局面から計画されている。子どもたちは他者とコミュニケーションを図りながら話したり、語ったりしながら言語的表現力や思考力を磨き、集団行動やあそびを通して空間と関わるシンボリックな活動を経験し、身体から始まる創造的体験によって、イメージや表象をともなった表現力を身に付けていく。そしてドラマは、子どもが持っている身体感覚や想像力を生かしながら創り上げられていく。同時にテアートロ活動によって豊かな人間関係を育みながら、子どもたちは社会的に文化的に成長していくということが、実際に授業を参観して理解された。

筆者がこの小学校の４年Ｈ組のテアートロ活動を参観したときは、フェスティバルの直前であったが、子どもたちが集団の中で自立した表現者として行動していると感じた。指導者にそのことを伝えると、「はじめはそうじゃなかったのですよ」という言葉が返ってきた。普段の授業からフェスティバルに至るドン・ニョッキ小学校の一連の過程で、俳優で演出家のフィオッキ氏 M.Fiocchi がアドヴァイザーとして関わっていた。テアートロの専門家が教育現場をよく理解し、教員と協力して子どもの表現活動を支援することの意味は大きいと結果を見て感じた。

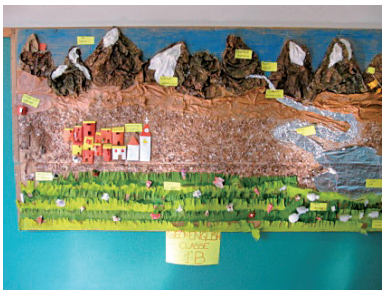
○ドン・ゼノ **Don Zeno**
　中学校（オレーノ市）

テアートロ活動を取り入れた「地理・英語」の授業（中学１年）

同左

自作の歌を演奏する生徒（中学１年）

表現活動の授業：音楽を聴きながら描く（中学１年）

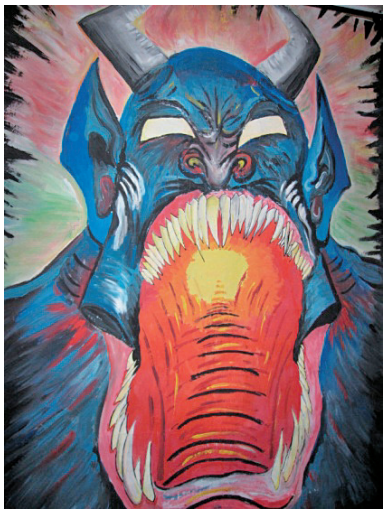


「地理・英語」の授業で制作したレリーフ

テアートロ形式の英語の授業

体育館にて

テアートロ・ラボラトリ：ダンス（中学３年）


校内を飾る生徒の作品

生徒たちが制作した仮面

美術室

教師たち

○ A. モーロ A. Moro 小学校
（メッツァーゴ市）

校舎（幼稚園、中学校併設）

折り紙の作品展示

１年生の教室

テアートロ活動の授業（１年）

色彩に関する展示

ラボラトリ活動「教育ダンス」（５年生）

同上

併設する中学校のバンド活動

「俳句」についての説明

○ドン・ニョッキ **Don Gnocchi**
　小学校（コンコレッツォ市）

校庭の一角

校庭

同上

校名の石碑

校庭の菜園

児童の作品

食堂にて

ミラノ県第60学区でテアートロ教育、「少年たちの舞台」の活動を推進する（左から）**L. Cazzaniga, C.Penati, B. Cerreda, A. Valera**

少年たちの舞台　Un Palcoscenico per i Ragazzi

第22回大会　2009年５月

中学生のオーケストラ演奏

『ÁTREBIL の島』（ドン・ニョッキ小学校４年）

『大変、成績簿が消えちゃった』（A. モーロ小学校５年）

『遊んだことのないあそび』（ドン・ニョッキ小学校３年）

同上

同上

同上

同上

同上

同上

『大変、成績簿が消えちゃった』（A. モーロ小学校５年）

『空を飛んでやってきた』（G. マルコーニ小学校）

『空を飛んでやってきた』（G. マルコーニ小学校）

『エイ、先史時代のお前』（アイ・ノストゥリ・カドゥーティ小学校）

『幸せの花びら』（ファルコーネ・ボルセッリーノ中学校）

同上

同上

『ジャングルの本』（A. マンゾーニ中学校）

同上

『幸せの花びら』（ファルコーネ・ボルセッリーノ中学校）

同上

『エイ、先史時代のお前』（アイ・ノストゥリ・カドゥーティ小学校）

同上

同上

『ロメオとジュリエット』（G. レオパルディ中学校）

『恋する若者たち』（A. マンゾーニ中学校）

『保護区』（A. ベネデッティ／E. マヨラーナ高校）

『塀、星、地平線』（S. パッチーニ中学校 Sovico：Mi）

『美しい夜』（E. ヴァノーニ高校）

同上

同上

『保護区』（A. ベネデッティ／E. マヨラーナ高校）

『もし地震があったら、ひたすら踊ろう』（リバルタ・ノヴァーラ演劇学校）

同上

同上

同上

V　イタリアの新しいカリキュラムと表現教育の位置付け

1．新しいカリキュラムの基本方針・目標

1997年に教育省 Ministero della Pubblica Istruzione[1]（以下 MPI）の諮問機関として、義務教育の新しい方向を検討する委員会が組織され、「基礎教育のための本質的課題」*I contenuti essenziali per la formazione di base*（MPI 1998）が示された。その中で次のように教育の意義が述べられている。

心の言語 linguaggi della mente と身体の言語 linguaggi del corpo の相互連関の重要性、それは認知過程 processi cognitivi と情動 emozioni の間にある伝統的な壁を取り払い、それらを統合するシステムによって人の考えを表出させ、両者（心と身体）は人間形成に向かって動的なバランスをとりながら知覚・運動 percettivo-motoria、論理的・思考的 logico-razionale、情緒・社会 affettivo-sociale の各要素の連携を図る。

（MPI 1998, pp.140-141）

その後2007年に「幼稚園・小中学校のカリキュラムのための指針」*Indicazioni per il curricolo per la scuola dell'infanzia e per il primo ciclo d'istruzione*（MPI 2007）が教育省から告示された。この指針によってイタリアの学習指導要領 I programmi ministeriali scolastici は、中学校については1979年版，小学校については1985年版、幼稚園については1991年版の刷新が図られた。

ここで注目すべき点は、この2007年版がそれまでの学習指導要領とは異なり「カリキュラムのための指針」と呼称されたことである。その理由は、前述の教育改革「アウトノミーア」に対応して、各学校の創意によるカリキュラム編成を促進させることを目的としたからである。本稿では第1課程 primo ciclo と呼ばれる義務教育の小中学校の内容について検討していく。

まず全体の基本方針の中で「文化的基礎教育」*L'alfabetizzazione culturale di base* という項目が設けられ、次のように教育目標が記されている（筆者抜粋）。

－文化を構成するシンボリックな言語の修得を通して基礎的な学習を促進させる。
－小学校児童に、認知的、情動的、情緒的、社会的、身体的、倫理的、宗教的側面から成長する機会と、生涯にわたって有用な知識を与える。
－中学校では現実をみる視点、世界について解釈、表象、表現する方法を培うために教科の学習へ生徒を導く。

（MPI 2007, pp.42-43）

これら目標を実現するために教科の枠組みを柔軟に捉え、領域横断的体験 esperienze interdisciplinari が教科間の知識の連携を生み出し、社会の状況や学問に関する複雑な問題に対応する学習方法を身につけさせると述べられている。

続く「学習環境」*L'ambiente di apprendimento*（MPI 2007, pp.44-46）の項では、学習内容の定着の

[1] 2008年からは Ministero dell' Istruzione, dell' Università e della Ricerca : MIUR（現在に至る）

ために児童生徒の経験と知識を活用すること、多様性に対し適応して行動すること、探求や発見を促進させること、協働的な学びを支援すること、学び方に対する意識を促進させることについて記されている。これらを実現するためラボラトリ形式 forma di laboratorio による学びを推奨している。ラボラトリは日本の「総合的な学習の時間」と類似するもので、課題について話し合いや振り返りの機会をもちながら学習活動の振興を図り、実験（試行）と計画性を促進させる方法である。児童生徒が共有体験を通して思考・実行・判断しながら、実践的に活動を進めていくラボラトリは、学校内外の学習環境を効果的に活用する機会となるであろう。そのために学校は科学、情報、音楽的創作、テアートロ、絵画、身体表現などと関わった活動のために環境づくりを進めるよう言及されている。それぞれの学校の学習計画の独自性や実践性がこのラボラトリに現れるだろう。

A.Moro 小学校（**Mezzago** 市）５年クラスのラボラトリ授業「教育ダンス」**Danza Educativa**

Don Zeno 中学校（**Oreno** 市）１年クラス「地理・英語」**Geo–English**（合科目）のテアートロ活動を取り入れた授業

２.「言語・芸術・表現領域」の理念

カリキュラムの改訂を図った「幼稚園・小中学校のカリキュラムのための指針」の大きな特徴は、従来の教科をⅠ）言語・芸術・表現、Ⅱ）歴史・地理、Ⅲ）数学・科学・技術、の３領域に分け、領域内で教科が連携して横断的な学習を進める方向を打ち出した点にある。

「言語・芸術・表現領域」Area Linguistico-Artistico-Espressiva は１）イタリア語、２）コミュニティ言語、３）音楽、４）美術とイメージ、５）身体・運動・スポーツ、の5教科から構成されている。この領域の基本方針が次のように述べられている（筆者抜粋）。

－言葉 le lingue とノン・ヴァーバル言語の修得は、複数の教科の合流によって実現される。それは人間の思想の表明、コミュニケーションの必要性において人類共通の基盤である。
－ヴァーバルな言語や図像、音、身体を用いる人間は、場、性格、状況を生きたものとして語り、描写し、想像力豊かな集団を形成しながら考えをまとめ、共通の感情を表現するためにそれら言語を活用する。
－身体言語は、身体が空間に存在する様々な方法（形）によって、芸術的コミュニケーションや日常的コミュニケーションと協働する。

－学習は常にインターカルチャーな視野と、子どもたちの実態を生かす視点から計画される必要がある。子どもたちの異なる文化的体験は、知覚、感性、身体のあり方や空間のあり方に条件付けられていることを考慮する。

（M.P.I. 2007. pp.47-48）

ここに示された観点から、ノン・ヴァーバルな言語である音や図そして身体が、ヴァーバルな言語と同等に扱われ、それら多様な言語が共通の要素や機能を持っていること、それら言語は各々固有のコードを有しながら、ある言語のコードから別の言語のコードに転換する可能性があること、そしてそれら言語表現の多様性を体験的に知ることの意義が述べられている。このように子どもたちは、様々な言語の特殊性と統合によって生み出される効果的なコミュニケーションの形式を学んでいく。

3．教科「音楽」

教科「音楽 Musica」（MPI 2007, pp.64-67）では音楽を、創造性と共有体験を生かし、共同体参加の意識をはぐくみ、多様な文化と豊かな関係を有するシンボリックな空間を提供するものと特徴付けている。また、音楽の表現や鑑賞（歌唱，器楽，創作，鑑賞，批評）は音楽性を高めながら、それらは人間の知覚・運動、認知、情緒・社会の要素の統合を促進させると捉えられている。そして即興的に表現したり、創作したりしながら、知識、思考、判断といった異なる段階を通して創造的に学習活動を進めていくよう説明している。小学校、中学校ともに、様々な表現形式や理論、システムを音楽体験に統合するために、ダンス、テアートロ、造形芸術、マルチメディアの活用が勧められている。

教科「音楽」の記述内容から学習方法の具体的な指針を次のように読みとることができる。

－小学校では、音楽的能力を伸ばすために声、ことば、身体、楽器、図形、情報技術など、種々の表現形式を活用すること。

－中学校では、他の領域の知識、芸術的表現、音楽的体験を統合すること、それにふさわしい理論やシステムを活用して音楽作品を批評的に理解し、解釈すること、他の芸術的形式、ダンス、テアートロ、造形芸術、マルチメディアを音楽的プロジェクトの実践において統合すること。

続いて音楽教育の人間形成的（教育的）役割　funzioni formative dell'educazione musicale として次の６項が提示されている。

①認知的・文化的役割 funzione cognitive–culturale

実在するものをシンボリックに表現するプロセスの経験。柔軟で、直観的、創造的思考力を伸長する。音楽文化の作品への参加 **partecipazione** を促進する。概念、精神性、生き方や価値観を形成、意味的世界を構築する教科固有の能力を活用する。

②言語的・表現伝達的役割 funzione linguistico–comunicativa

音楽言語固有の技法や方法を通して子どもたちを表現、コミュニケーションの活動へ導く。

③情動的・情緒的役割 funzione emotivo–affettiva

芸術作品と関わることによって情動のシンボリックな形式化について省察、情動に対する認識を

活用する。

④アイデンティティー形成の役割 funzione identitaria

自分たちが帰属する文化的伝統について理解、同時に他の文化的伝統を尊重、比較、理解するための方法となる。

⑤人間関係づくりの役割 funzione relazionale

グループや他者との人間関係を促進する。

⑥批評的・美的役割 funzione critico–estetica

多様な音のメッセージや芸術作品を解釈、批判的に聴取することにより、芸術的感性を育成し、自主的な評価力（判断力）、文化に対する美的感受性を高める。

（M.P.I. 2007 pp.64-65）

ここに挙げられた６項の役割の中で、筆者は特に「③情動的・情緒的役割」に新しいカリキュラムの理念が現れていると注目する。

４．情動と言語表現

2007年の「カリキュラムのための指針」では、言語を表現・伝達の機能を持つものとして位置付け、それを文化の多様性と関わって合科的・領域横断的に学習できるよう「言語・芸術・表現領域」が設けられた。その中で、認知の過程において情動 emozione の働きを生かすという観点から言語表現教育が捉えられている点に注目する。この情動という語は、小学校、中学校とも旧学習指導要領では使われていなかったが、この新しい「カリキュラムのための指針」で頻繁に用いられるようになった。形容詞の情動的 emotivo は、情緒的 affetivo と並列して何度も使われていることから、「情動」を情緒と区別して、動的な感情として捉えていると解釈される。認知の過程にこの情動の働きを生かすために、本指針では身体の役割と連関することを重視している。

この認知、情動、身体を連動させて学習を進めるという考え方には、ガードナー H. Gardner,、モラン E. Morin、ゴールマン D. Goleman といった最近の心理学や認知科学を中心とする新しい研究動向が反映しているだろう。このことを指導実践の立場から言えば、何をどのように感じて、どう表現して伝えたいのか、思考や判断を通して常に学習活動において問われているということである。このことは、テアートロ教育の実際を参観した筆者が実感するところでもあるが、ここに心と身体をつなぐイタリアの教育理念の特徴が顕著に現れていると言えるだろう。

Ⅵ　テアートロ・ムジカーレの実践論

1．テアートロ教育における音楽の活用とテアートロ・ムジカーレ

（1）テアートロ教育における音楽活用の検討

ミラノ県第60学区のテアートロ活動の中で音楽やリズムは、身体表現やドラマのシーンを特徴付けるために欠かせない要素として活用されていた。しかし筆者が参観した授業や発表では、音楽はいわゆるサウンド・トラックやBGMといった形が中心で、つまり副次的に使われることが多く、感情やイメージを身体やことば、演技で表現するように、子どもたちが音・音楽を、自分たちの表現言語として創造的に活用するという例はあまり見られなかった。イタリアのテアートロ教育の創意の中で、子どもたちの自発的な表現言語として音・音楽がどう捉えられているのか。それを明らかにするために、音楽に軸を置いたテアートロ・ムジカーレ Teatro musicale（音楽テアートロ）の実践論に視点を移して考察を進めていく。

（2）プロジェクト研究「テアートロ・ムジカーレ：領域横断的体験」を例に

「テアートロ・ムジカーレ：領域横断的体験」IL TEATRO MUSICALE : Un'esperienza interdisciplinare[1]というテーマによるプロジェクト研究が、1998年３月から2000年１月までの期間、教育省の助成により実施された（代表：M. F. Nastro Lombardi）。教育の研究開発を目的としたこのプロジェクトは、ミラノを拠点にして全国規模で展開し、研修プログラムには初等・中等学校の約600人の児童生徒と90人の教師が参加した。この研究活動を推進した中核メンバーは、教育省視学官、中学校の校長と教員、州教育研究所研究員、コンセルヴァトーリオ（音楽院）教員、舞台やマルチメディアの専門家たちである。

本プロジェクトは２回の全国規模のセミナーとワークショップ、その間にアクション＝リサーチ、協議会を挿む形式で進められ、テアートロ活動の教育的意義、指導方法、テアートロ教育と音楽領域との関わりについて実践的な研修活動を展開した。このプロジェクトに参加した教師たちは、研修した内容を自分の学校現場に戻って実践し、その結果を再びセミナーや協議の場で報告し合いながら研修の充実を図った。

①テアートロ・ムジカーレのあり方

このプロジェクト研究においてタスケーラ L. Taschera はテアートロ・ムジカーレについて、身体表現、言語表現、造形的表現の３つの表現を統合する音楽のパフォーマンスであると定義し、音楽はドラマ化 drammatizzazione において、また美的・情動的局面において、表現・伝達の機能を持つものであると位置付けている（CD-ROM: MPI 2000）[2]。

---

[1] CD-ROM, Ministero della Pubblica Istruzione Direzione Generale dell' Istruzione Secondaria di Primo Grado（2000）に全プロジェクトの内容がまとめられている。
[2] file://D:/teatromusicale/materiali.html

②テアートロ・ムジカーレの検討と課題

本プロジェクトは一般教育と専門教育を連携する形で進められたが、その成果を検証するために最終段階で６つの州の10の音楽系中学校（Scuola media ad indirizzo musicale）[3]がテアートロ・ムジカーレの舞台発表を行っている（表１参照）。これには音楽の専門的なレベルにおいて一定の成果を示したいという意図があったようだ。ワークシート１はその時活用されたものである。

表1

参加した音楽系中学校名（市）	演　　目	テキストの原作者
PASCOLI-CURNO (Bergamo)	Chi ha rubato ancora l'arcobaleno	教師
GALILEI-BOLLATE (Milano)	3 Quadri dalle "Cosmicomiche"	Italo Calvino
GIOVANNI XIII ARONA (Novara)	Il principe felice	Oscar Wilde
ANZANI-CANTU (Como)	Il Piccolo Principe	Antonie Saint-Exupèry
BORSI (Livorno)	Racconti di fantascienza	I. Asimov e S. Benni
SARNELLI (Polignano a Mare, Bari)	Storia di una gabianella.....	Luis Sepùlveda
RUGGIERO (Caserta)	La fiaba, cultura dei popoli	教師
MAZZINI (Siracusa)	Arfeo ed Aretusa	教師
NEGRI (Milano)	Ma mère l' Oye	Maurice Ravel
C.PORTA (Milano)	Lavoro introspettivo	生徒

○ワークシート１

幕・場	シーン・筋書き	音楽・音	舞台美術・照明	活用する教科領域	
				知　識	方　法

この音楽表現の多様な可能性を試行したテアートロ・ムジカーレの発表内容[4]から、筆者は音楽の役割を次のＡ、Ｂ２つのタイプに分類する。

Ａ：舞台上に役者や踊り手、舞台下（あるいは横）に演奏集団という体制をとり、音楽が人物描写、動き、舞踊、情景や場面と効果的に結び付く。
Ｂ：舞台上の役者が劇中で歌ったり、楽器を演奏したり、時には音の表現を創造的に使う。

---

[3]イタリアで音楽系中学校は1979年から開校されている。アンサンブルと音楽理論・ソルフェージュの授業が週1時間ずつあり、週１回午後に選択した楽器（ギター、フルート、ピアノなど）の個人レッスンを受ける。専門家の養成が目的ではなく，普通中学校よりも音楽を学ぶ機会を充実させることが趣旨である。
[4]記録映像（CD-ROM: M.P.I. 2000）

A・B混合の発表形式の実践例もあったが、概してAタイプの場合、演奏や作曲（アレンジを含む）の表現に専門性が求められるため、音楽の独立性が高まり、音楽は劇や舞踊に付帯した機能をもつことになる。そのことは音楽系中学校の発表から把握されたが、本発表は、生徒と教師が連携しながら台本、音楽、衣装、舞台美術の創作を進めた結果であり、テアートロ・ムジカーレのあり方として評価されるだろう。

このテアートロ・ムジカーレの表現と先に見たミラノ県第60学区のテアートロ表現を比較すると、どちらもドラマと身体による表現という共通点を持ちながら、前者では音楽がセクションとして独立性を保ち、後者では演劇や身体表現が主軸になるため、音楽が子どもたちの生きた表現として活用されないという傾向が現れる。それは、テアートロ教育とテアートロ・ムジカーレの教育では、それに携わる指導者の専門性（演劇、ダンス、音楽など）や目的が異なるためであると言えるだろう。筆者の当初の課題意識に立ち返ると、表現という目的において音楽の専門性が、他領域の専門性と対等に交わりながらどのように一つの作品を創造していくかについて、改めて可能性を問いたいと考える。そのためには音楽を含めた表現言語を、テアートロ教育において基礎的なレベルから、また総合的にどのように活用するか、その方法論が求められるだろう。

2．P. ボーヴェのテアートロ・ムジカーレ教育実践モデル

プロジェクト研究「テアートロ・ムジカーレ：領域横断的体験」の中心メンバーであったボーヴェ P. Bove は、テアートロ・ムジカーレを教育的観点から「舞台表現という目的において用いられる身体、声、テキスト、楽器など、多岐にわたる様々な言語と表現形式の活用」（Bove 2006, p.13）と定義する。ボーヴェは本プロジェクト研究の後、テアートロ・ムジカーレの教育実践を一般的なレベルで定着させる必要があると考えて実践研究を続けた。そしてその成果を方法論として著書『テアートロ・ムジカーレ：領域横断的経験 *Il teatromusicale, Un'esperienza interdisciplinare*』にまとめている（Bove 2006）[5]。その中でテアートロ教育は，感覚的領域 area sensoriale、物質的領域 area materiale、概念的領域 area concettuale の3領域が連携して実践される必要があると主張する（Bove 2006, p.100）。感覚的領域とは、身体を通しての感覚や運動感覚、物質的領域は、共有されたイメージや感情を有形にする創造（物質的生産）、概念的領域は、プロジェクトをまとめるための認知や思考である。この考えをもとにボーヴェはテアートロ・ムジカーレ実践の基礎モデルとして図1を示している（Bove 2006, pp.85-86, pp.133-134）。

[5] ボーヴェはテアートロ・ムジカーレの実践論の基礎付けとして A. Tomatis（聴取と声、演奏する身体）、É. Jaques-Dalcroze（動きと音楽性）、F. Delalande（音楽形式の体験）、E. Willems（音楽における情動）、J. Paynter – P. Aston（創造性と音楽）を取り上げている（Bove 2006, pp.23-60）。また身体教育については I. Gamelli（2001，2005）の実践論を特に評価している。

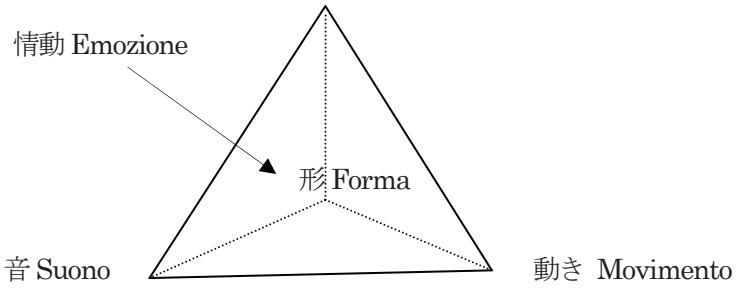


図１（Bove 2006, p.133）

三角錐の底面の３点に「音」「動き」「形」の物理的要素が位置する。この３要素の表現を生み出すのが三角錐内部に置かれた「情動」であり、３要素の表現は思考によって統合され、創造性へと高められるとボーヴェは考えた。補足すると、「音」は効果音、声、旋律、リズムなど、「動き」は身振り、動作、パントマイム、ダンスなど、「形」は設定された空間（舞台）、場面を生み出す物質（光によって表出するもの、舞台美術など）である。この３要素は舞台上で合流したり、対照（分岐）したりしながら無限の関係性をもって表現を実現していく。

このモデルに示されたボーヴェの実践論では「身体」が重要な役割を担っている。身体の内側は感じる身体、外側は表現する身体として捉えられ、外的空間に存在する身体は、身体を通して音や声、動きを生み出すことができる。音と動きは連動し、音によって動きが生まれ、動きによって音が生み出される関係をもつが、それを可能にするのが身体である。ボーヴェの実践モデルにおいて情動が表現の原動力として位置づけられているのは、身体の内側で感じられないものは真の表現に結びつかないと考えられているからである。情動をともなった音・動きの表現は、空間に創り出される図形や造形と互恵関係を促進させながらテアートロ・ムジカーレのシーンを生成させていく。

ワークシート２・３は、ボーヴェが指導して実際に行われた小学児童[6]のテアートロ・ムジカーレ表現のプロットであるが、「動き」「音」「形」の３要素連携の観点から活動の手順が示されている。３要素のうち２つずつ組み合わせ（動き＋音、音＋形、形＋動き）、その組み合わせを替えながら表現活動を展開するこの形式は、小学校の学習に適するとボーヴェは考えている。その理由は、児童は表現活動を通して要素と要素の組み合わせ、またある要素から別の要素への変換の関係性を経験的に把握することができるからである。

ボーヴェのテアートロ・ムジカーレ実践論の検討課題として、「動き」「形」「情動」と連動する「音」（音楽）の表現が、どのように技能や形式のレベルアップを図るのかについて、さらに明らかにされる必要があるだろう。

2012年３月３日と10日の両日、国立ミラノ・ビコッカ大学教育科学部でボーヴェの授業「テアートロ・ムジカーレ教育」（ラボラトリ形式の集中講義）を参観した。声、動き、リズム、音素材、図形、身体表現を組合せ、各要素の働きがどのように相互に連携しながら一つの表現へと統合していくか、段階的指導を通して学生たちが実践的に理解していく様子が観察できた（p.51 写真１～９）。

[6]Bergognone Foppette 小学校（ミラノ市）３～５年児童

○ワークシート２

＜自然の目覚め＞ A，B ２つのグループによって構成された活動			
工　　程	動き－音	音－形	形－動き
＜関連する教科と内容＞ ○音楽・身体表現・科学 「進化」「動物・ 植物」「鉱石の王国」 ○地理・歴史・社会 「地質時代」 ○イタリア語・音楽 テキスト表現	グループＡ： 音を奏する（オルフ楽器活用） グループＢ：動く ・A、Bともディノザウルス、草木、岩山を表現する	グループＡ ・音の描写と交互に、また重ねて「自然の目覚め」のテキストを読んで表現する	グループＢ ・テキストの描写内容に従って行動する －ゆっくり、 重々しいディノザウルス －風に揺れる草木 －転がって砕けた岩
連結（「動き－音」 →「音－形」→「形－動き」のそれぞれ間をつなぐ）	太鼓： 規則的なリズム	拍を刻む	動物たちの仕草をして歩く

（Bove 2006, p.136）

○ワークシート３

＜動物たち＞ 小単位のグループと個人によって自由に構成された活動			
工　　程	動き－音	音－形	形－動き
＜関連する教科と内容＞ ○音楽・身体表現・科学 「進化」「水中」「地上」「空の生活」 ○地理・歴史・社会 「進化」 ○美術 「形と色」	オルフ楽器を使って適合する音を追求する 1．水の音（金属楽器） 2．大地の音（膜鳴楽器、マラカス） 3．空の音（笛） 4．森の音（木製楽器、太鼓ほか）	動物たちの動作を示唆する 1．長く続く、pとf 2．規則的、 休止など 3．グリッサンドなど 4．軽妙なリズム（動物に応じて変える）	場面（シーン） をともなって 1．オットセイ、ワニなど 2．ヘビ、カメなど 3．ワシなど 4．オラウータン、ライオン、ハイエナ、レイヨウ、オオカミなど （動物の仮面や化粧を活用する）
連結（「動き－音」 →「音－形」 →「形－動き」 のそれぞれ間をつなぐ）	太鼓：規則的なリズム	拍を刻む	動物たちの仕草をして歩く

（Bove 2006, p.137）

ワークシート２、３は一連の４つの場面、１）世の始まり、２）自然の目覚め、３）動物たち、４）人類、のうち２番目と３番目である。「形」はテキスト、舞台上の配置、仮面、化粧など。

国立ミラノ・ビコッカ大学教育科学部「テアートロ・ムジカーレ教育」の授業風景

講師：P. ボーヴェ　2012年３月３日、10日

写真１　講義

写真２　声のアンサンブル

写真３　身体の動きと空間

写真４　図形的表現を活用して

写真５　図形的表現を活用して

写真６　リズム表現と動き

写真７　様々な音素材・楽器

写真８　音の表現

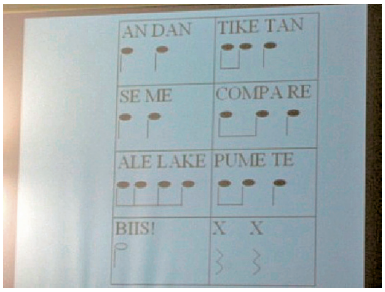


写真９　リズム譜

Ⅶ　日本の音楽科教育の課題とテアートロ教育の関連

１．わが国の音楽科教育の課題　―音楽学習指導要領における「思いや意図」と関わって―

平成20年１月、中央教育審議会答申において音楽科改善の基本方針が示され、その中で「思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力を育成すること」と述べられた。「思いや意図をもって表現…」はそれまでの学習指導要領にはなかった文言であり、わが国の新しい音楽科教育を方向付けるキーワードとして注目される。この「思いや意図」は、子ども一人ひとりを表現の主体として捉えようとする音楽科の姿勢が、より明確に表わされたものであると考える。それを音楽の表現活動や学習においてどう展開していくべきであろうか。

音楽科では知識理解、技能の習得を学習の基礎としながら、感受と表現の両面において感性を磨き、表現力を育成することが目標となる。そして音楽の表現活動は、集団において他者と互いに触発し合いながら、子どもたちの発想・工夫・表現の力を伸ばしていく。そこで大切なことは、ともに学ぶ共同体の中で個と全体が独自性や共通性を認識しながら、いかに共感し、表現内容を共有できるかということである。つまり、自分と他者の間で「思いや意図」を伝え合う場が必要になる。

一方、従来から教科書の頁には「情景や様子を思い浮かべて」「詩の内容を感じ取って」といった学習活動が示され、音楽作品から受けるイメージや感覚、さらにテキスト解釈による意味内容を表現へと生かすよう求められてきた。このような解釈・表現へのアプローチは、音楽科の指導方法を特徴付けるものであるが、しかし実際に感じとったこと、イメージしたこと、これら「思い」の内容を「意図」によってどう表現されるのかといった関連性がつかみにくく、時には心情面だけが先行していないだろうか。教師は児童生徒がイメージしたり、感じ取ったりしたことを把握し、それを表現へと有効に展開できるよう指導方法を工夫しなければならない。

ここで述べた課題意識は、人と人が関わり合う場や、想像やイメージを喚起しながら意味内容が共有される場，それら場をいかにつくり出すかという、筆者の研究の視点とつながっている。これら「思いや意図」というキーワードによって捉えられる課題に対して、情動、身体、表現を関連付けるイタリアのテアートロ教育の理論と実践から少なからず学ぶことがある。ヴァーバル、ノン・ヴァーバルの様々な表現言語は、まさに「思いや意図」を表出させるために活用されるものであり、感覚や感情、イメージ、想像といった情動をともなう認知や思考が、身体や言葉、音・音楽など表現言語と連動し、表現を結実させていくという点において、音楽教育とテアートロ教育の指導理念は共通していると言えるだろう

これまで考察してきたテアートロ教育の理論や実践が、わが国の表現教育実践にどのような示唆を与えるのか、「教員養成・研修プログラムへの活用」と「児童の表現活動」の二つの視点から検討していきたい。

２．教員研修における表現活動の試み

筆者は、平成21年と同22年に神奈川県の小学校教員対象の研修「確かな学力をはぐくむ教科指導研修講座６　小学校音楽」（神奈川県立総合教育センター主催）を指導し、この２回の研修で「『思いや意図をもって表現する』について考える」という課題を設定した。以下、平成22年の研修を中心にその趣旨と内容について説明する。

研修会名称：平成22年「確かな学力をはぐくむ教科指導研修講座６　小学校音楽」
主催：神奈川県立総合教育センター
日時：平成22年７月29日（木）9：00 ～ 16：30
場所：神奈川県立総合教育センター　善行庁舎　音楽科研修室
担当講師：中嶋　俊夫（横浜国立大学教育人間科学部准教授）
参加者：神奈川県小学校教員25名

（１）研修会要項（筆者作成）

①研修課題

「思いや意図をもって表現する」について考える
（「確かな学力をはぐくむ音楽科の指導」「確かな学力をはぐくむ教材と指導の工夫」をふまえて）

②課題設定の趣旨

平成20年３月告示の小学校の新学習指導要領「音楽」では、「思いや意図をもって」歌い、演奏し、音楽づくりや鑑賞を進めることが求められている。そこで実際に児童が感じとったこと、イメージしたこと、それら意味内容がどのような方法でどう表現されるのか、その関連性を理解するために「身体」と「音・音楽」の２つの方向から表現活動を試み、これらアプローチによって「思いや意図」が表現へと実現することを体験する。「身体」と「音・音楽」の表現を対照することにより、表現の意図がより明確になることがねらいである。

③準備するもの

○身体表現にともなって活用できるもの：リボン、布切れ、ビニールシート、風船、ボール、バトンなど、携行できるものを１つか２つ。
○音の出るもの・楽器など：携行できるものを１つか２つ。
教育センターにある楽器も使用できるが、各自でも何か準備すること。必ずしも楽器である必要はなく、手づくり楽器、効果音が出せるものなども活用できる。

④研修内容

○討議１：「思いや意図をもって表現する」をどう解釈するか
これまで児童と表現活動をした経験（音楽に限らない）から、参加者がこの課題をどのように捉えているか、意見交換を行う。あらかじめ話す内容をまとめておく。
○表現実践：テーマを「身体」と「音・音楽」で表現する

グループに分かれて活動を進める。それぞれのグループはテーマ（たとえば「森」）から感じたこと、思い描いたことを書き出し（言語化し）、それらを「身体」と「音・音楽」によって表現することを試みる。グループ分けは当日行う。
○討議２：「思いや意図をもって表現する」を学習活動においてどう展開するか
　表現実践から学んだこと、それを子どもたちの学習にどう生かせるかを考えていく。

⑤服装
　動きやすいもの

（２）平成21年の研修内容の検討

　平成21年の研修で参加者は、「風」「水」「火」などのテーマをグループに分かれて表現する活動に取り組んだが、その方法は「身体」と「音・音楽」の両方の表現が一つの場でシンクロナイズするという形で進められた。この方式では、身体と音・音楽が有機的に関わって表現されるため、強弱やテンポの変化、遠近、伸縮、間や表情など、構成要素や形式の面から表現内容の共有化が図られるというメリットがあった。しかし身体よりも音楽の方が優位性を持つグループの場合、音楽に身体の動きをただ合わせてしまう傾向がみられ、当初の目標が達成できたかどうか疑問が残った。

（３）平成22年の研修内容

「身体と音・音楽による表現―題材『森』」
　平成21年の結果をふまえ平成22年の研修では、「身体」と「音・音楽」の表現を分け、題材「森」の内容をまず「身体」で表現し、その次に「音・音楽」の表現に取り組むよう課題を再設定した。その理由は、表現内容にともなうイメージや感情をまず「身体」で捉え、表現者が身体を通して感じたことを表出するという経験を核にして表現活動を展開したいと考えたからである。

○活動の手順
　１）題材について「なに」（感情、筋書き、情景など）を表現する・したいかを話し合い、書き留める…意識的に「思い」を伝え合う段階［ワークシートA①］
　２）１）の内容を整理し、全体の構成を考える…「思い」をグループで共有する段階［ワークシートA②］
　３）２）の内容を「何を使って」「どのように」表現するかを書き込む…表現への「意図」を認識する段階［ワークシートB］（「身体」「音・音楽」別々に作業を進める）
　４）２）と３）の構成内容の表現を試みる…「思い」が「意図」によって表現される段階（「身体」「音・音楽」別々に表現づくりを進める。適宜、持ち寄った素材、道具、楽器などを活用する）
　※３）と４）の活動は同時進行してもよい。
　５）各グループの実演発表…表現して伝える段階（先に「身体」、続いて「音・音楽」による表現）

○実際の表現内容と活動

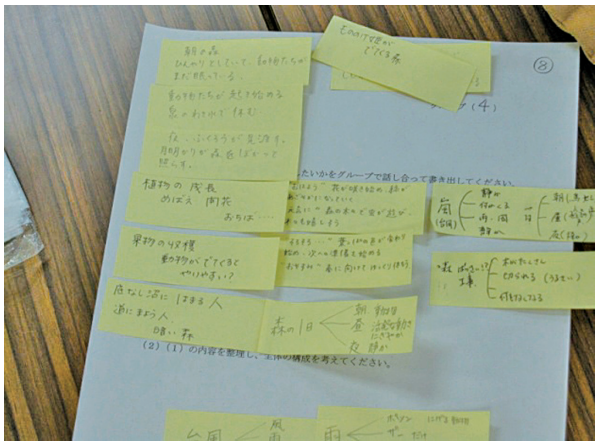
この活動で使われたワークシートＡ・Ｂ（筆者創案）のうち、Ａはグループで話し合いを進めながらテーマ「森」の表現内容を構想し、それにともなうイメージや感覚、感情の共有化を図ることを目的としている。一方ワークシートＢでは、身体を通して認知し表現した経験を、音楽の表現方法に有機的に生かそうというねらいがある。５人一組、５つのグループが活動したが、その中から第３グループのワークシート（筆者転記）を下記に示す。

ワークシートＡ

① 表現内容：何を表現するか・したいかをグループで話し合って書き出す。
冬 → 春へ
森の成長（子ども → 大人）
森の夜明け（夜 → 朝）
森 → 破滅 → 復活
天候の変化（晴れ → くもり → 嵐 → 晴れ）

② ①の内容を整理し、全体の構成を考える。
Ⅰ．平和な森 ［静］
Ⅱ．森の危機 ［動］
Ⅲ．復活 ［静］
（木：４本　鳥：１羽）

グループでの話し合い


ワークシートに貼られた付箋

次のワークシートＢ「表現内容」の欄にワークシートＡ②の内容項目を挙げ、「身体」「音・音楽」でそれぞれどのように表現するかを書き込む。

各グループが表現内容として挙げた項目には、天候・自然などの情景や場面、人物、動物、感情（たとえば恐怖）などがあった。実演発表はまず身体表現をした後、音・音楽の表現に移った（pp.56-57 写真１～５）。発表者が表現内容についてどのような感覚や感情、イメージを持ち、それをどう表現していくかという課題は、表現のための材料や方法を精選しながら「思い」→「意図」→「表現」のプロセスを体験することになる。

ワークシートＢ

表現内容	身体（何を使ってどのように表現するか）	音・音楽（何を使ってどのように表現するか）
平和な森	㊍：風船と体全体を使って、穏やかな風と木を表す。 ㊐：布を羽に見たて、小走りに走って楽しい森の生活を表す。	・ミニマラカスを優しくまわす。 ・カスタネットを小さく鳴らしたり、大きく鳴らしたりする。 ・団扇の根元（ギザギザ）を串でこする。 ・ミニオカリナで高い音を出す。 ・トライアングルで優しく音を出す。
危　機 （破滅）	㊍：腕を小刻みに震わせて端の木から順番に倒れる。 ㊐：布を取り、首に手をかけて苦しみを表す。	・タンバリンを強くたたく。 ・ドン　ピアノの低い音。 ・箱に入れたビー玉を鳴らす。
再　生 （平和な森）	㊍：一人一人が体を低い位置から回転しながら高く伸び上がる。 ㊐：徐々に体を起しはじめ、軽快に走りまわる。	・フィンガーシンバル ↓ （平和な森と同じ）

２時間という限られた時間ではあったが、グループ内で＜森＞からイメージすること（思い）、＜森＞について何をどう表現したいか（意図）について活発に意見が交わされ、様々な試行を重ねながら参加者たちは２つのパフォーマンスを完成させていった。表現のアイデアやイメージを共有し、表現方法を獲得する上で、言語的コミュニケーションの役割は大きく、またその役割は実演発表が終わった後の話し合いでも同様であった。「なぜあのような動きをしたのか」「その素材を使ったのはなぜか」「何をどう表現したかったのか」などの質問に表現者側は答えた。これらのやり取りは、表現者の「思いや意図」を確認する場となったが、みる・きく側からは「自分はこう感じた」「このように解釈した」といった意見も出され、表現と感受相互において「思いや意図」の交換ができたことは有意義であった。

写真１　音・音楽による表現の練習風景

写真２　身体表現による発表

写真３　身体表現による発表

写真４　身体表現による発表

写真５　音・音楽による発表

３．表現活動を通して子どもを知る、子どもと関わる　―領域横断的表現活動を教員養成プログラムに生かす―

筆者が大学の教員養成課程で担当する授業「教育実地研究」は、学生が専門的な教科指導や教育実習を経験する前に、学校現場について体験的に理解を深め、子どもとの関わり方を学ぶことを目的としている。平成22（2010）年度後期に担当したクラス（１年対象）[1]で、筆者は「表現活動」を通して大学生が子どもを理解できるよう授業を計画した。その課題設定の趣旨は下記の通りである。

○課題「児童の表現活動を構想する」

趣旨

学校生活や学習活動において、児童は様々な表現活動を行っている。表現手段は、ことば、語り、詩、身体、色彩、図形、立体、音、音楽、衣装、道具、ダンス、劇…など多様であるが、大切なことは、子ども一人ひとりが何をどう感じて（あるいは考えて）どう表現したいか、それが学習活動においてどのように実現されるかということである。表現活動を通して子どもたちが感性や表現力を磨き、人間性豊かに成長できるよう支援することが本課題の趣旨である。

このクラスの学生20名は、横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校で４年２組（赤坂桂教諭学級）の児童たちと交流しながら授業観察をしたり、学習活動に参加したりした。本附属小学校では、各クラスがそれぞれ特色ある学習課題に年間を通して取り組むことを推奨している。４年２組は身体と関わる運動・表現に前年度から熱心に取り組んでいるクラスである。以下は学生の参加体験活動の一部である。

（11月26日）

・音楽の授業で児童と学生は班に分かれていっしょにリズムを創作し、それをボディー・パーカッションで表現し、リレー形式で発表。

・体育の授業でキャッチボールや競技「フラッグフット」に参加。

[1]前年度まで教科専門ごとに２年授業としてクラス編成が行われていたが、平成22年度から１年対象の科目となり、教科専門領域によるのではなく、課程全学生を一律に分けたクラス編成による授業となった。

（12月17日）
「表現発表による交流」
・児童：音楽に合わせて跳び箱，マット、けん玉、ダンスを発表、その後、身体と音・音楽による創作表現『鬼と遊ぶ』を発表。
・学生：和楽器演奏（篠笛・締太鼓）、リコーダー・アンサンブル、ダンスを発表。

（１月14日）
・学生による創作表現の指導：テーマ『四季』を身体表現と音楽表現で子どもたちに創作させる学習活動（連続した２時間の授業）。

児童と大学生のこれら表現活動は、まさにテアートロ活動である。表現者が表現したい内容を見る側きく側にどのように伝え、どのように伝わるか、その表現のプロセスにおいて様々な学びがある。学生たちがこれらの体験を通して、「表現」を特定の教科や活動に限定することなく、多様な場で活用されるものとして捉えることできるようになったと感じる。この視点は子ども理解や指導力といった教師の資質と大きく関わると言えるだろう。

４．テアートロ・ムジカーレのモデルからみた附属鎌倉小学校の創作表現

（1）創作表現『鬼と遊ぶ』

４年２組の創作表現『鬼と遊ぶ』は、前年度３年２組のときから赤坂桂教諭指導のもと、２年間かけて取り組んだ表現活動の成果が結実したものである。子どもたちの身体は、マットや跳び箱によって個々の運動能力を伸ばしており、その土台の上にイメージや感情、場面などを表現する身体活動の経験が積まれていた。この『鬼と遊ぶ』は、子どもたちが大きな模造紙に描いた６枚の絵[2]を１枚１枚提示しながら、それが場面づくりの役割を果たし、各場面は「身体」と「音楽」の２つのグループのコラボレーションによって表現された。児童の身体表現はのびやかで表情豊かであり、一人ひとりが感じていることを表わそうとしている実感が伝わるものであった。音楽グループは、音素材や楽器を使ってこの身体表現と協働し、静と動、間、スピード感と連動しながら激しさ、恐怖、いたずらっぽさ、優しさなどの感情を身体グループと共有していた。

（2）ボーヴェの実践モデルとの関連

この創作表現は先述のボーヴェの実践モデル図１（p.49参照）と関連付けられる。「音」「動き」「形」は、この実践では「音・音楽」「身体表現」「描かれた絵」と置き換えることができる。附属鎌倉小学校４年２組の実践に触れて、筆者はいくつかの課題意識を改めて抱くようになった。

音・音楽の表現は身体表現と協働するとき、構成要素や形式、間などを共有し、それが表現方法の探求や創造性へと進展を図るチャンスを生み出す。しかし一方で、音・音楽表現は身体と連動すると身体の動きに合わせようとするため表現の幅が制限されやすくなる。その場合、静と動、強弱、緩急など２項対立的要素から表現を捉え、その結果いくつかのパターンの繰り返しに陥りやすくなる。

---

[2]子どもたちが，美術館で鑑賞した渡辺豊重の原画『鬼と遊ぶ』に触発されて描いたもの。「鬼と風」「襲いかかる赤」などのタイトルが付けられている。

この４年２組の音楽表現を指導した小川百合子教諭（音楽専科）は、その多様性をどう生み出すかという問題意識をもって取り組んでいる。小川教諭の創作表現へのアプローチは他に、美術（図工）領域（高松智行教諭）と連携して行われた６年クラスの例（平成19年度）がある。プロジェクターで映し出された絵（抽象画）の中から子どもたちは1枚を選び、その意味解釈の内容をグループで音楽づくりしていくというものである。先の４年２組とは発達段階や授業計画も異なるので客観的な比較はできないが、絵画は身体表現と比べると静の要素を有するため―もちろん額縁の中にはいろいろなムーブメントが表現されているが―、音楽表現に自由度を与え、音・音楽の世界を創造的に、また想像的に思考しやすくなると考える。実際に６年クラスの絵画を用いた活動ではそのことがよく現れ、即興的な要素と形式的な要素（音階や和音、リズムパターン、音色の構成など）の両方が組み合わさって表現が創り上げられていた。これら実践結果から、異なった表現言語が場を共有するとき、その異なった関係や組み合わせによって表現が変化するということに改めて気づかされる。その意味で音・動き・形の３要素から表現を捉えたボーヴェのモデルは、テーゼ、アンチテーゼの両方向からさらに検討する価値があるだろう。

附属鎌倉小学校４年２組児童と学校教育課程1年学生たち

Ⅷ　結び　―わが国の教育実践と関わって―

イタリアの学校・社会においてテアートロ教育の意義は、言語的表現（ヴァーバル、ノン・ヴァーバル）による創造性とコミュニケーション能力の育成、美的感性や情動と関わる人間形成という点において共通認識されている。学校が地域社会に開かれた環境の中でプロジェクトが推進し、地域が文化的教育活動を支える力となっていた。

イタリアのテアートロ教育から学ぶことは、舞台発表という結果においてではなく、そこに至るプロセスにおいて、情動・認知・表現・コミュニケーションという局面を相関的にとらえ、子どもの表現力を段階的に引き出していくところである。テアートロ活動は子どもたちの想像力を刺激し、感覚や感情、イメージいった情動をともなう認知や思考を、身体と言葉を使って引き出し、表現へと結実させていく。本研究を通してそのプロセスをどう指導していくかについて、認識を新たにするようになった。テアートロ教育の理念や実践が、わが国の教育に何を示唆するのか考えていきたい。

１．皆が参加する場　―劇あそび・自然な表現力―

本研究動機で述べたように筆者は、表現者同士が好ましい人間関係を育み、表現内容に共感しながら表現活動が進められるよう「場づくり」という視点を大切にしてきた。現実の場であれ、想像された場であれ、何かを感じ取ったりイメージしたりするとき、それらはその場に身を置いているという「身体性」によって捉えられると考えた。筆者は自らの課題意識「表現を共有する場」を、実践を見据えてⅰ）皆が参加できる場、ⅱ）コミュニケーションの働きを活用する場、ⅲ）表現内容に共感し、意味解釈（コンテクスト）を共有する場として捉えている。まさにテアートロは、これらⅰ）ⅱ）ⅲ）の場を基盤にして表現者の活動を進展させる空間であると言えるだろう。これら３つの「場」は、はじめから「わからない」「難しそう」と思ったりせずに表現の場に参加し、他者との関わりの中でコミュニケーションを図りながら表現活動を進めるために必要な条件である。子どもたちが表現活動をするとき、活動内容や表現したい内容、また音楽に対して「やってみたい」「おもしろそう」などの気持ちをもって参加することが、表現活動するはじめの段階として大切にされるからである。

この「皆が参加できる場」という観点から、ミラノ県第60学区の「少年たちの舞台」のフェスティバルで取り入れられていた「劇あそび gioco drammatico」の形式に注目する。授業や舞台の実際と教師たちの指導方法から、筆者は「劇あそび」を取り入れたテアートロ実践を次のように捉えている。[1]

○劇あそび

舞台上でグループ（あるいはクラス）全員が常にいっしょに行動し、子どもたちは設定された場面の中であそびながら、自発的に様々な表現活動をする。それが一つのドラマとして展開する。完全な即興劇ではないが、あそびが即興的表現を引き出し、効果的に使われる様々なマテリアル

[1]「劇あそび」について Perissinotto（2000）p.28, OLIVA（1999b）pp.57-59を参照。

（道具や素材）や音楽が身体表現と協働する。ストーリーは子どもたちの合意にもとづいて展開していくが、題材は空想の世界や探検物語、あるいは子どもの日常そのものであったりする。筋書きや脚本は、子どもたちの創意により年間の活動を通して作り出されたものであり、舞台上での動き、演技、台詞などは子どもの体験や想像にもとづく自然な表現である。

このようにあそびの要素は幼児・児童の表現活動にも有効に生かされるだろう。オリーヴァが提示する次の図１には、人間の身体と精神が持つ潜在的な能力が、自然な表現力として現われ、指導や学習を通して表現方法を磨きながら、舞台表現へと進展する方向が示されている。皆が参加できる「劇あそび」は、自然な表現力とテアートロを結ぶ表現活動として価値付けられると考える。

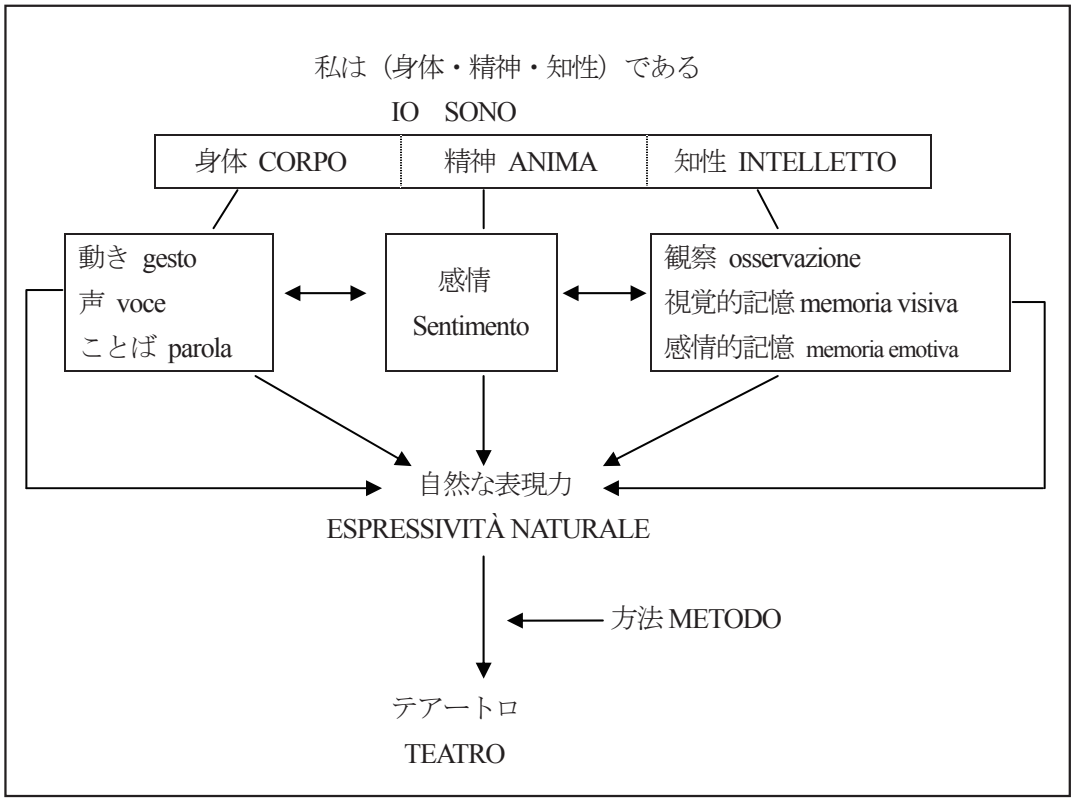


図１　Oliva, G. (1999a), Il laboratorio teatrale, LED, Milano, p.98

２．身体の役割

イタリアの教育理念では認知と情動のプロセスが表現・伝達へと生かされるために、「身体」というキーワードを据えることで方向性を明確にしている。身体は人間の内と外をつなぎ、理解し、伝える役割を担うからである。

わが国でも身体的表現が、共感を高めたり、音楽の様々な要素を感じ取ったりする活動に有効であることはよく認識されている。これまで音楽と身体表現の結びつきは多くの場で実践されてきた。ダルクローズ（È. Jaques-Dalcroze 1865-1950）のメソードに代表されるように、身体の動きを通して音・音楽を感知することにより、音楽の要素や形式などの理解が促進されることは知られて

いる。たとえば強弱、遠近、伸縮といったダイナミクスの構造的要素を、空間において身体が表現するという経験は、音・音楽による表現にも生かされるという考え方である。また別の見方をすると、音・音楽による表現は鳴らす、歌うといった身体的行為であるので、その意味でも身体表現と共通点を見出すことができるだろう。

本研究の構想において筆者は、音・音楽に反応する「身体」という捉え方に依拠するだけではなく、まず「身体」を「思い」にともなわれる感覚や感情を受け止める主体として位置付けようと考えた。これら知見とイタリアの表現教育の理念に鑑みてリズム、音、音楽に対して運動感覚的に、あるいは内的に反応する身体が、情動（内的に感じたこと、わき起こる感情）と関わりながら音楽表現を方向付ける役割を持つということを、実践的に意義付ける必要があるだろう。

このように実践的な立場から身体性と表現の関係を追究していくと、身体、認知、情動、現象と関わる諸学の論理に目を向けさせられる。その一例ではあるが、ヘンルマン・シュミッツ著の『身体と感情の現象学』（シュミッツ　1986）は興味深い。場所を身体と関わって絶対的、相対的と捉えるその理論から、筆者は次のように思索する。

身体という絶対的な場所があるからこそ、相対的な場所としての空間から多様な感覚や現象を感知することができるのだろう。たとえば雲が漂っている様をみたり、想像（空想）したりするとき、その様は絶対的な場所である身体を通して感じ取られる。この場合、身体と雲の位置関係は対照しているのか、また雲が身体そのもののように感知されるのか、様々な状態が考えられるだろう。イメージや感覚、そして感情を身体的状態感として人間がとらえているということに真実があるなら、「思いや意図」は身体性をともなって想起されると言えるだろう。すると身体性を通して想起された「思い」は、表現の道具としての身体、音・音楽を通してどのように表出されるだろうか。そこには心身の様々な働きや言語、認知と関わる表現の営みがあるだろう。

3．言語の役割

わが国の音楽学習指導要領において注目される「思いや意図」には、様々な感覚やイメージ、感情をともなうと考えるが、それら感じられたことが、漠然としたものからより明確なものとして意識化するために、言語（ここではヴァーバルな言語）の役割があるだろう。「どのように」「どれだけ」「なぜ」という問いに自分自身に、あるいは他者に向かって答えることが求められるとき、その言語活動は、物事の本質や特徴を捉えたり、感じ取ったことの根拠を示したりというように、分析的、構造的な思考力を感性と連動して磨くだろう。このような言語活動が、理論や技能の習得を通して表現や鑑賞の能力を継続的に発展させると考える。もちろん、音楽の本質などすべて言語で表現できないし、あるいは言語で表現することを意識した結果、音楽の実体から離れてしまう可能性がある。また日本の美意識において「あわれ」「粋」など、多くを語らずして一言で美的感覚を共有する文化もある。

しかし言語は、音楽科の学習活動の展開の中で「思いや意図」を認識し、表出するために不可欠である。言語は、表現や鑑賞といった音楽科固有の学習内容の定着のために、有機性をもって活用されなければならない。だがここで改めて注意しなければならないのは、音楽は多重構造であり、様々な要素や形式から成り立っている。知覚し、認知したことの要因は複合的であるだろうから、的確に対象と要因を結びつけられる場合と、子どもの思いや意図の対象が多面的である場合があるので、この点については留意されなければならない。たとえば教師が、聴いた音楽から拍子の特徴

を子どもに捉えさせようと質問した場合、子どもから「流れるような」や「弾む」といった答えが返ってくるとする。このとき、それら答えは必ずしも拍子だけを認知した結果ではないという可能性があるからである。このように言語（ヴァーバル）は感性や感覚、想像と認知や思考をつなぎ、表現に至るプロセスにおいてなくてはならない働きを持っている。

「場」「身体」「言語活動」と関わって「思いや意図をもって表現する」という問題を考察していくと、テアートロ教育も同じ考え方に基盤を置いていると言える。身体、情動、知性と連動しながら美的感性を育む表現教育のあり方を、教育現場の実情に鑑みていま一度問い直す必要があるだろう。

４．わが国の教育実践に何が求められるか

日本の小学校の音楽の授業では、低学年では「あそび・参加型」の学習形態が生かされるが、学年が上がるにつれて「テキスト解釈・表現追求型」へと移行する傾向があるように思う。「あそび・参加型」をある発達段階に限定せず、集団と個の表現を生かすためにもっと幅広く活用できないだろうか。この点においてイタリアのテアートロ教育の理念と実践から学ぶことは少なくないはずである。

またイタリアの新しいカリキュラムに示されたように、表現活動が教科を越えて領域横断的に進められる方針は、わが国の総合学習や生活科の方向性とも共通する。幼児教育において表現活動が総合的に捉えられているように、小学校低学年の生活科においても、音楽・体育・図工などと合科的に表現活動が進められるよう示唆されている。しかし、中学年や高学年ではその傾向がみられなくなる。また総合学習においても音楽が他教科、他領域とどのように連携し可能性を広げるかについて[2]，実践論として学校現場で十分認識されているとはいえない。表現活動と教科・領域との連関性、そして心身の表現の意味を、理論と実践においてもっと明確に位置付けられるべきではないだろうか。

これまで述べてきたようにテアートロ教育の最も大切な意義は、「身体性」を通して実感し、実感をともなった表現を生成させることにある。現在のわが国の教育は、「思考力・判断力・表現力」「読解力」「言語活動」などをキーワードとする新たな方向を重視し、学習評価も観点別により細分化されている。しかしこの状況は、表現と関わる学習において形式が先行し、身体性をともなった実感に至る前に、頭でデータを処理することを―しかも短時間で―求めてしまってはいないかと危惧される。たとえば歌詞の解釈一つをとっても、子どもたちの発言の中に自分の実感としてではなく、ときに「教師から求められていること」を発言するという意識を持たせてしまってはいないだろうか。授業では当然のことながら論理的な理解は大切であるが、「心が動く」場があってこそ学習内容が生きたものになるのではないか。「限られた時間数」と「計画的・形式的学習形態」のために結果を急ぎ、「心が動く」場が失われないよう配慮されなければならない。舞台表現教育、テアートロ教育の研究を通して、音楽科教育、ひいては教育全体の目指すべきところをこのように問い直している。

---

[2] 音楽教育実践ジャーナル vol.8 no.2 特集『音楽科と他教科との連携』（日本音楽教育学会 2011）はこの課題に対して、国内外の視点から示唆を与えている。

下の図２は、音楽科教育の視点から筆者が表現への学習プロセスを捉えたものである。活動の基盤にはｉｉｉｉｉの「場」がつくられること、主体である表現者の思いや意図（あるいは情動をともなった認知や思考）が生かされること、それが様々な学習と方法（手段）に培われて表現へと至ることを説明している。

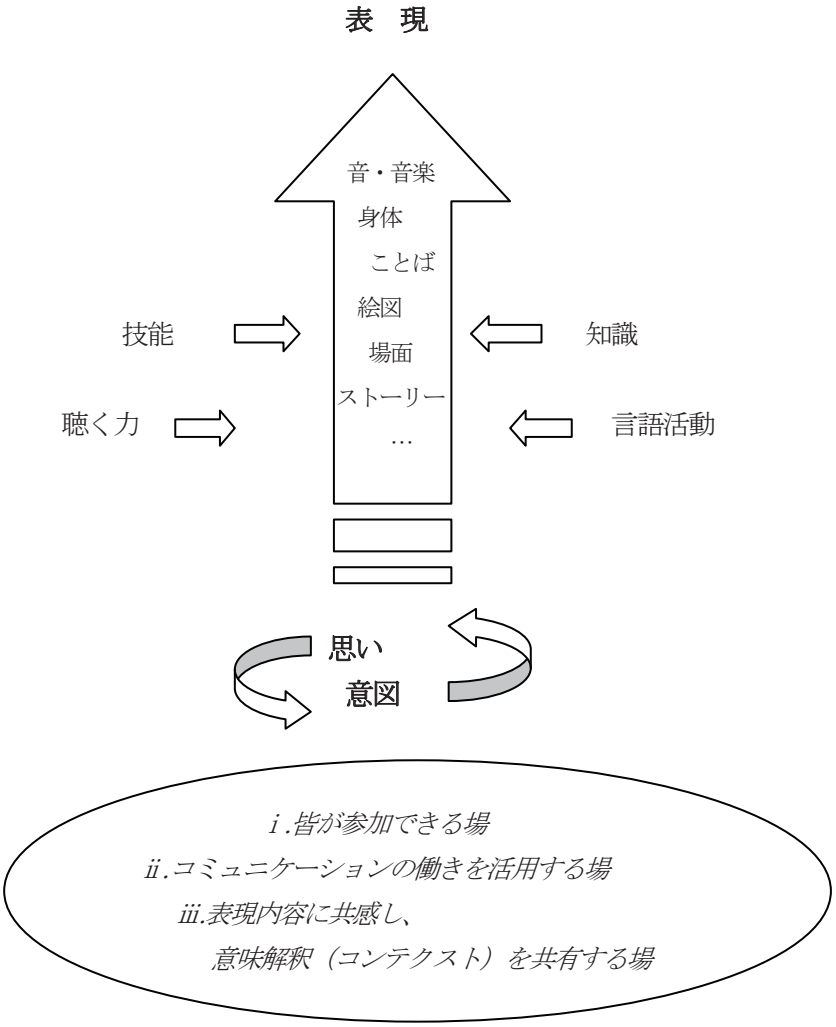


図２　音楽科学習活動における「思いや意図をもって」と表現の関係

５．まとめにかえて

本研究は、イタリアの新しいカリキュラムとテアートロ教育からテアートロ・ムジカーレの実践論を導き出し、わが国の表現教育、その中でも音楽表現のあるべき姿を検討することが目的であった。それがどの程度実現したかについてはいくつか課題が残るが、成果があるとすれば、音楽表現に舞台という場（広義には表現・伝達の場）が与えられるとき、様々な表現言語（ヴァーバル，ノン・ヴァーバル）が連動し、生成するシーンによって音楽表現がもっと生きたものになるという可能性を見出せたことである。表現したい者がいて、興味を持ってみる者がいる、この両者の関係が成立する場はどこでもテアートロになり得る。そのように考えると教育活動に携わる私たちは、表

現したい子ども、楽しんでみたりきいたりする子どもをどのように育てていくべきか、本研究報告を通して認識を新たにすることができた。

昨今わが国では、学校、地域における青少年教育のあり方、「生きる力」を養うコミュニケーションや感性・情緒と関わる体験的活動、教員の資質能力の向上など、学校や社会で様々な課題の充実化が求められている[3]。それらに応えるためにも、本研究を継続的に発展させていきたいと考える。

---

[3]中央教育審議会
・今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）2006年７月11日
・幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）2008年１月17日
・新しい時代に求められる青少年教育の在り方について（諮問）2008年４月18日

文化協会「少年たちの舞台」2009-2010年度活動報告書より

DAL GIAPPONE AL VIMERCATESE E TREZZESE
IL PROFESSOR TOSHIO NAKAJIMA, UNIVERSITÀ DI YOKOHAMA

È stato con noi, nella settimana dal 16 al 25 maggio 2009 il professore di Pedagogia della musica dell'Università di Yokohama **Toshio Nakajima** per una ricerca sul ruolo della musica negli spettacoli del teatro-scuola in Italia. Ha assistito a lezioni nella scuola secondaria di 1° grado di Oreno di Vimercate, presso le Primarie di Concorezzo e Mezzago, a prove di spettacoli della scuola Primaria di Concorezzo e secondaria di 1° grado di Bellusco e agli spettacoli in calendario nelle date suddette. Un'esperienza davvero arricchente per le osservazioni e le riflessioni emerse. Il professor **Toshio Nakajima** ha mantenuto i contatti con noi, ha svolto un convegno in Giappone sul teatro in Italia.
Scambio e dibattito si sono realizzati presso la sala di Concorezzo, soprattutto per i gruppi delle Primarie, a Ornago tra i gruppi liceali di Desio e Lovere; a Bellusco tra i gruppi del territorio e di altra provenienza.

La presenza ad alcuni spettacoli del professor Toshio Nakajima, di Dirigenti Scolastici, di Assessori e Sindaci ha valorizzato la cultura di chi cresce e ha fatto sentire loro la vicinanza con le Istituzioni e la cultura che ci unisce.

Il professor Toshio Nakajima è tornato nel mese di ottobre (in occasione di un incontro presso l'Università Cattolica di Milano), per assistere ad altri laboratori teatrali avviati nelle nostre scuole.

RICERCA SULL'ESPRESSIONE MUSICALE DEI BAMBINI CON RIFERIMENTO ALL'EDUCAZIONE TEATRALE IN ITALIA.

MOTIVO DELLA RICERCA

Sono docente universitario di Didattica Musicale del corso di formazione degli insegnanti delle scuole elementari e medie. Ritengo sia importante che gli studenti prima di vivere l'esperienza dell' insegnamento al corso di tirocinio, conoscano la sostanza dell'espressione musicale dei bambini.
Quest'ultima è rappresentata da vari elementi: la voce, il movimento corporeo, il gesto, il mimo, la situazione, la percezione e l'immaginazione di una trama (pre-esistente o creata nel momento dell'esibizione), e poi naturalmente la musica trattata.

A tale proposito, ogni anno progetto un teatrino in cui gli studenti e i bambini hanno la possibilità di interscambiare la propria espressione musicale. In un primo momento i bambini sono solo spettatori dello spettacolo, realizzato dagli studenti. Successivamente, gli studenti coinvolgono i bambini, i quali sono invitati a partecipare attivamente.
In questo modo i bambini, in diretto contatto con la musica e il teatro, esprimono spontaneamente una certa situazione.

Attraverso la mia ricerca, vorrei dunque analizzare tale relazione tra l'espressione musicale e il suo contesto e l'approfondimento dei progetti scolastici attuati in Italia, che promuovono l'educazione teatrale, e lo studio degli effetti della loro realizzazione, rappresentano una importante fonte per la mia ricerca.

prof. Toshio Nakajima
professore associato in pedagogia musicale
Università di Yokohama
Facoltà di Scienza dell'Educazione

（上段）「日本からヴィメルカーテとトレッツェーゼの市民へ：横浜国立大学 prof. 中嶋俊夫」

横浜国立大学で音楽教育を教える中嶋俊夫氏は、2009年５月16日～25日の間、イタリアのテアートロ教育の実践における音楽の果たす役割について研究するため、私たちの活動に参加しました。氏はオレーノ、コンコレッツォ、メッツァーゴ、ベッルスコの各市町村で初等・中等学校の授業や、児童生徒のテアートロ発表のリハーサル、また本番の上演を参観しました。調査研究のために有意義な体験をされ、我々との交流を継続しながら、氏は日本でイタリアのテアートロ教育についての研究発表を展開しています。氏は各市町村の学校において、大会に参加したグループの生徒や教師たちと意見交換や討議を進めました。中嶋氏、市長、教育長、視学官らの大会への参加は、子どもたちの文化を評価し、そして我々は、教育や文化によって一つにつながっていると実感させられる機会となりました。

中嶋氏は10月に―ミラノ・カトリック大学で授業する機会に―再び戻られ、私たちの学校のテアートロ活動を視察されます。

（下段）「イタリアのテアートロ教育と子どもの音楽表現との関わりについての研究」

私（中嶋）は小中学校の教員養成課程で音楽教育を担当する大学教員です。私は、学生たちが教育実習で学習指導を経験する前に、子どもたちの音楽的表現の実体を知ることが大切であると考えています。子どもたちの音楽的表現は、声、身体の動き・表現、場面設定、感覚、イメージ、ストーリー、そして音楽など様々な要素をともなって実現します。

この目的から私は毎年、児童と学生が音楽表現を通して交流する機会（舞台）を計画・実施しています。この交流会ではじめは、子どもたちは大学生のパフォーマンス（劇）をただ観ているだけですが、大学生たちは次第に子どもたちを表現活動へと引き込んでいきます。こうして子どもたちは音楽と舞台表現を通して主体的に活動するようになります。

私はこの研究を通して、音楽表現とそのコンテクストの関係を分析・考察したいと考えていますが、イタリアの学校で活発に展開するテアートロ教育の成果について実践的に深く理解することは、私の研究の大切な基盤になるでしょう。

中嶋俊夫（横浜国立大学教育人間科学部准教授・音楽教育学）

(foto 1)Alla scuola secondaria di 1° grado di Vimercate, Saltini di Oreno, 28/10/09 e
(foto 2 e 3) **CON I SUOI STUDENTI**

（左上）オレーノ市の中学校で講演、2009年10月28日

（右上下）中嶋氏の学生たち

国立ミラノ・ビコッカ大学とイタリア音楽教育協会ミラノ支部共催セミナー要項

於・国立ミラノ・ビコッカ大学　2011年３月14日

「音楽テァートローイタリアと日本の初等教育における研究と教員養成の取り組み」

Società Italiana per l' Educazione Musicale
(SIEM) di Milano

Facoltà di Scienze della Formazione
Dipartimento di Scienze umane
Per la Formazione "Riccardo Massa"

SOCIETA' ITALIANA PER L'EDUCAZIONE MUSICALE
Rappresentante Italiana dell'ISME
International Society For Music Education

UNIVERSITA' DEGLI STUDI DI MILANO BICOCCA

Lunedì 14 marzo 2011 dalle 16.00 alle 18.00
Edificio U16, aula laboratorio musicale*

Incontro con

Toshio Nakajima

Insegnante di Pedagogia Musicale, presso la Facoltà di Scienze Umane e dell' Educazione dell' Università di Yokohama – Giappone (*Yokohama National University*).

***Il Teatromusicale*: esperienze formative e ricerca nel primo ciclo d'istruzione in Giappone e in Italia**

su invito di **Emanuele Ferrari**
introduce e coordina **Paolo Bove**

Sono invitati gli studenti del Corso di Laurea in Scienze della Formazione Primaria, supervisori del tirocinio, insegnanti di scuola dell'infanzia, primaria e secondaria di I grado,

nonché soci e amici della SIEM di Milano

Potete segnalare la vostra partecipazione con un messaggio al 3488102803

*Edificio U16 - aula laboratorio musicale - Via Giolli (angolo via T.Mann) - Milano

教育研修組織 OPPI とイタリア音楽教育協会ミラノ支部共催セミナー要項

於・民衆大学（ミラノ市）、2012年３月17日

「音楽テアートロ：領域横断的経験」

Ente con personalità giuridica
DPR 19.10.1977, n. 1001
Registro persone giuridiche
Prefettura di Milano n. 234

ENTE RICONOSCIUTO DAL MIUR PER
ATTIVITÀ FORMATIVA
Direttiva n. 90/2003

SEMINARIO di formazione con attività di LABORATORIO

IL TEATROMUSICALE Un'esperienza interdisciplinare

SABATO 17 MARZO ORE 14,30 – 17

Presentazione:
Elena Torti *-Socia e collaboratrice dell'OPPI*

Interverranno:
Toshio Nakajima *-Pedagogia Musicale, Università di Yokohama – Giappone Yokohama National University -*
Carlo Delfrati *- Accademia del Teatro alla Scala*
Paolo Bove *-Laboratori Teatromusicale, Università Bicocca Milano*
Antonella Caputo *-Laboratori Psicomotricità e Musica, Istituto di Psicomotricità di Anne-Marie Wille Milano*

L'incontro è stato pensato per offrire l'opportunità di scoprire le possibilità creative e interdisciplinari della musica attraverso insegnamenti teorici e sperimentazioni pratiche che confluiranno nell'esperienza del *Teatromusicale*.
Verrà presentato il Progetto di un corso modulare di formazione didattico-musicale di base, finalizzato all'acquisizione di competenze in ambito scolastico, educativo e formativo. Il Progetto sarà realizzato nell'ambito dell'accreditamento al MIUR ed inserito nel Catalogo dell'Offerta formativa della Regione Lombardia.

PRESSO SIEM Via Terraggio, 1 - MILANO (cit. Università Popolare) MM1 Cadorna

Sono invitati gli operatori del settore musicale, docenti della scuola primaria, secondaria di primo e secondo grado, educatori, formatori e genitori sensibili alla crescita musicale dei propri figli.

INCONTRO GRATUITO - È gradita la prenotazione tel. 3488102803

SIEM Società Italiana per l'Educazione Musicale, sezione di Milano
c/o Università Popolare Via Terraggio, 1 -20123 MILANO- Tel 3488102803
CCP n°000013300207 www.formare.org/siemilano.htm

OPPI – Organizzazione per la Preparazione Professionale degli Insegnanti
Ente accreditato M.I.U.R. Decreto 08.06.2005 e Regione Lombardia n. 207-1/8/2008 Albo Enti Accreditati – CF 02711300158
Azienda con Sistema Qualità Certificato UNI EN ISO 9001:2008 – Internet http://www.oppi.it – e-mail oppi@oppi.it – oppilegal@pec.it
Via Console Marcello 20 e Pza Villapizzone 1 – 20156 Milano – Tel. 02/33.00.13.87 – Fax 02/39.26.90.27 – IBAN IT39Q0335901600100000007212

REG. N. 3822
UNI EN ISO 9001:2008

（講演内容）
ラボラトリ形式による教育セミナー

音楽テアートロ：領域横断的経験

―日本の教育実践と関わって―

2012 年 3 月 17 日　14：30～17：00
民衆大学 Università popolare（ミラノ市）にて

Ⅰ　はじめに

私は横浜国立大学教育人間科学部の初等・中等教育教員養成課程で音楽教育学を教えています。3 年以上前から日本の文部科学省の科学研究費の補助を得て「イタリアの社会と学校における舞台表現教育と音楽表現との関わりについて」というテーマで研究しています。

I.　Introduzione

Sono docente universitario in Pedagogia Musicale nel corso di formazione degli insegnanti delle scuole primarie e secondaria di primo e secondo grado, presso la facoltà di Scienze Umane e dell' Educazione dell' Università di Yokohama (Yokohama National University). Mi sto occupando da più di tre anni di una ricerca intitolata "Il rapporto tra l`espressione musicale e quella teatrale in Italia", supportata dal Ministero dell`Educazione, della Cultura, dello Sport, della Scienza e della Tecnologia del Giappone.

およそ 25 年前からイタリアの義務教育における音楽教育について研究してきましたが、この 10 年の間にイタリアの学校教育は、アウトノミーア autonomia（学校の自主自立）の推進とその他の教育行政の動きによって変化している点に特に注目しています。その中で音楽的活動は新しい可能性に向かって開かれ、たとえばそれら活動は学校の授業であるラボラトリ活動によって領域横断的方向へ展開していると捉えています。

はじめに、日本の小学校の子どもたちが音楽発表会を行っている様子をビデオで紹介したいと思います。

Da circa 25 anni faccio ricerca sull'educazione musicale in Italia, in particolare modo sulla didattica nelle scuole dell'obbligo. In questo decennio sto osservando con attenzione come il contesto scolastico italiano stia mutando grazie al movimento dell'autonomia scolastica e gli altri interventi amministrativi : le attività musicali si sono aperte a nuove possibilità. Per esempio tali attività si sono estese in ambito interdisciplinare con il laboratorio.

Per cominciare vi vorrei presentare il video nel quale i bambini fanno il saggio di musica della scuola elementare giapponese.

［ビデオ１］
附属鎌倉小学校音楽会　2011 年 2 月 17 日　鎌倉芸術館にて
４年生クラス合奏と５年生の学年合唱の二例を紹介

子どもたちは、私が教えている学部の附属小学校の児童です。日本の他の小学校でも同じような

音楽活動をしています。日本ではこれまで、音楽教育は歌唱、器楽、読譜といった技能や知識をともなった実践的活動において一定の成果を上げてきました。このように日本の音楽教育は一つの側面において発展してきましたが、もう一つの側面、表現性（舞台表現性）についてはまだ十分に音楽教育の中に生かされているとはいえないでしょう。そのために音楽教育とテアートロ教育が連携することは必要であり、このことは私の研究の目的です。

Video 1

I bambini sono della scuola elementare annessa alla facoltà dell'università dove insegno. Anche alle altre scuole eseguono più o meno attività simili. In Giappone finora l'educazione musicale ha ottenuto buoni risultati nelle attività pratiche del cantare, suonare, leggere le note. Così in Giappone un asse dell'educazione musicale è ben sviluppato, mentre l'altro asse portante, quello della teatralità è ancora poco utilizzato all'interno dell'educazione musicale. La necessità di collegare l'educazione musicale alla teatralità è dunque lo scopo della mia ricerca. (Di questo spiego dopo.)

Ⅱ　テアートロ表現の教育的可能性
―表現活動を通して学校教育課程学生と子どもたちの人間関係づくり―

II. L'opportunità educativa della teatralità
- la relazione comunicativa fra i bambini e gli studenti del corso di "educazione scolastica" (corso di formazione) attraverso l'attività espressiva –

私たちの学校教育課程の 1 年次に「教育実地研究」という科目が置かれています。この科目の目的は実践と理論を通して学校教育の現状や教職について理解することです。ラボラトリ形式のこの授業において、私が担当する学生たちは大学の附属小学校に赴き、授業を観察したり、児童の学習活動に参加したりします。

Al primo anno del nostro corso di "educazione scolastica" è istituito un laboratorio semestrale di "Approccio alla realtà scolastica" ("Introduzione alla Professione dell'Insegnante"). Oggetto del corso è la comprensione della situazione scolastica attuale e la professione d'insegnante nei suoi aspetti pratici e teorici. Nel corso di laboratorio, i miei studenti entrano nella scuola elementare annessa alla nostra facoltà dell'università dove hanno l'occasione di osservare le lezioni e partecipare all'atto di apprendimento dei bambini.

［ビデオ２］

ここで音楽の授業のビデオを見ましょう。大学生と子どもたちがいっしょに身体を使ってリズム創作の活動をしています。

（2010 年度、附属鎌倉小学校 4 年 2 組の音楽授業）

Video 2

Vediamo un video dove gli studenti e i bambini fanno insieme un'esperienza didattica utilizzando il corpo per creare frasi ritmiche durante la lezione di musica.

様々な教育活動の中で私は音楽教育法を中心に教えていますが、教育実習など教える経験をもつ前に、学生たちが子どもの音楽的表現の実際を知ることが大切であると考えています。そのため毎年、大学生と児童が音楽活動を通して交流する催しを企画しています。この交流会では、始めに子どもたちは大学生の表現（劇や演奏）を観る側にいますが、大学生たちは徐々に身体表現やストーリー、舞台装置、歌声などを活用して子どもたちを自分たちの表現の中に引き込んでいきます。

このようにして子どもたちは自然に活動に参加し、音楽と関わりながら自発的に表現するようになります。

Fra le varie attività educative, mi occupo principalmente di insegnare “Didattica della Musica”. Ritengo sia importante che gli studenti prima di vivere l’esperienza dell’insegnamento, al corso di tirocinio didattico, conoscano la sostanza dell’espressione musicale dei bambini. A tale proposito, ogni anno progetto un piccolo spettacolo in cui gli studenti e i bambini hanno l’occasione di interscambiare la propria espressività musicale. In un primo momento i bambini sono solo spettatori dello spettacolo realizzato dagli studenti. Successivamente, gli studenti coinvolgono i bambini sulla scena utilizzando il movimento corporeo, l’immaginazione di una trama, la scenografia e poi la pratica vocale.

In questo modo i bambini sono invitati a partecipare attivamente, e in diretto contatto con la musica esprimono comportamenti spontanei.

[ビデオ 3]

小学校 2 年児童と大学生たちの活動をビデオで見てみましょう。

Video 3

-Vediamo il video che presenta l’attività dei miei studenti con i bambini della classe seconda della scuola primaria.

筋書き

劇の冒頭、悪魔バリトンは子どもたちに「もうこれで音楽の授業はできまい」と言い放ち、音楽の先生を誘拐する。歌うことが好きな少年タクトは、歌声のパワーによって音楽の先生を助けようとするが、バリトンの魔力にかかりパワーを失ってしまう。

頼みの国王はというと、風邪をひいて力がなく先生を助けることができない。そのため王はタクトを三人の音楽の女神（「リズム」、「メロディー」、「振付」）のもとへ派遣し、音楽パワーを取り戻すための修業を積ませるが、一人ではうまくいかない。そこでタクトは子どもたちに力を貸してほしいと呼びかける。

この劇のストーリーも使われる音楽も、学生たちの創作・アレンジによるものです。

Riassunto

All’inizio del dramma il Demonio Baritono rapisce la maestra di musica dicendo ai bambini: “Ora non potrete più fare la lezione di musica”. Un ragazzo di nome Takt, che ama cantare, vorrebbe salvarla con la potenza della sua voce ma stregato dalla magia nera di Baritono, non riesce più a cantare.

Anche il Re del paese non può salvare la maestra perché è senza forze a causa del raffreddore. Allora manda Takt dalle tre Dee di musica : prima Dea è Ritmo, la seconda è Melodia, la terza è Coreografia. Takt riceve dalle dee l’insegnamento e prova a esercitarsi per recuperare l’abilità vocale e musicale, ma da solo non riesce a

recuperare la musicalità. Allora Takt chiede ai bambini di aiutarlo esercitandosi con lui.

Sia la trama della storia che le musiche sono inventate dai miei studenti.

Ⅲ　テアートロ教育と児童の音楽表現との関わりについて
III　Ricerca sull'espressione musicale dei bambini con riferimento all'educazione teatrale

なぜ私が音楽教育と舞台表現性の関係が必要であると考えるのか。それを理由付ける二つの視点について述べようと思います。

Perché penso alla necessità di collegamento dell'educazione musicale alla teatralità? Vi presento due punti di vista per motivare la necessità.

○二つの視点
Due punti di vista

（1）第 1 の視点「音楽表現のコンテクスト」

音楽の表現とは、ただ書かれた音符を表現することではなく、それはしかるべき解釈をともなって実現されるものです。この解釈には、個人の感性や情動の働きが関与すると考えます。人が表現（シニフィアン）としての音楽を表現するとき、もしコンテクストを把握していなければ、表現された音楽はその人の真の表現にはならないでしょう。舞台表現性が音楽の表現教育に生かされる理由はここにあります。

先ほど観たビデオで子どもたちの参加の動機付けになったのは次のような欲求でしょう。

－悪魔に誘拐された音楽の先生を歌のパワーで助けたい

－主人公の音楽の力の回復を助けたい

私は、これら動機が音楽表現のコンテクストとしての働きをもっていると判断しています。

・Primo punto di vista "Contestualizzazione dell'espressione musicale"

L'espressione musicale non si realizza soltanto con leggendo le note, ma si realizza con la buona interpretazione. Questa deriva dalle sensibilità ed emozionalità dell'individuo. Quando l'uomo esprime la musica come "significante", se non trova la sua contestualizzazione, la musica eseguita non rappresenta la vera espressione dell'individuo. Per cui la teatralità contribuisce ad una educazione musicale espressiva.

Nel video che avviamo visto, la motivazione alla partecipazione dei bambini è data dal :

-volere salvare, con la potenza di canto, la loro maestra di musica rapita dal demonio

-volere aiutare il protagonista a recuperare l'abilità musicale

Ritengo che queste motivazioni avessero le funzione come "Contestualizzazione dell'espressione musicale".

（2）第 2 の視点「二つの場の共有」

音楽表現や舞台表現は、表現者が二つの場を共有することによって生まれると考えます。

一つ目の場は、表現者が物理的な位置関係において存在する場であり、表現者がコミュニケーションを図り、互いに知り合い、好ましい人間関係をつくる場です。

二つ目の場（架空の場）は、表現者の創造によって生まれる場、一人ひとりがテキストを自由に

解釈し存在する場です。

・Secondo punto di vista : “due spazi condivisi”

L’espressione musicale e teatrale, si esprime in due spazi condivisi dai partecipanti.
- Primo spazio : quello dove i partecipanti si trovano realmente e fisicamente, dove possono comunicare, conoscersi bene, avere una buona relazione tra loro;
- Secondo spazio (spazio ipotetico) : il mondo creato dall’immaginazione dei partecipanti, dove ogni partecipante prende parte interpretando liberamente il testo.

たとえばこの広間は私たちが存在する物理的な空間で、私たちはここで空気やにおい、温度、光、共感、不安、雰囲気などを感じています。もし今、私が皆さんに「私たちは森にいます」あるいは「空飛ぶじゅうたんに乗って雲の間を飛びましょう」と言ったとします。その場合、私たちは記憶や想像の力を働かせて、現実の空間にいるかのように空気や爽やかさ、解放感などを感じ取ろうとします。そして意見を交わしながら私たちが共有する世界（場）を創り出すことができるでしょう。

Per esempio, questa sala è un spazio reale dove noi ci troviamo, sentiamo l’aria, odore, tempertura, luce, simpatia, ansia, atmosfera...

Se adesso vi dico : “stiamo nel bosco” oppure “voliamo col tappeto volante tra le nuvole”. Possiamo come nello spazio reale sentire l’aria, freschezza, senso di libertà...attivando i nostri ricordi e immaginazione (spazio dell’immaginazione). Parlando tra noi potremo creare un nostro mondo (spazio) condiviso .

なぜどちらの場でも何かを感じることができるのでしょうか。それは身体性によって両者を認知することができるからでしょう。

Perché sentiamo qualcosa in entrambi gli spazi? Perché possiamo riconoscere entrambi attraverso la nostra corporeità.

第 1 の視点である「音楽表現のコンテクスト」は、「共有される場」が形成されることによって実現するのではないかと考えます。私の音楽教育法においてもっとも重要な課題は、「皆が参加して音楽的体験を共有する場」をつくることです。テアートロはまさに現実の場と想像の場、これら二つの場が交流するところです。そこは皆が参加して表現するところ、また音楽言語が、他の表現言語や表象形式（身体表現、ことば、ストーリー、形、色、舞台装置など）と結びついて、シーンという場によって生きたものになるところと言えるでしょう。

Penso che l’idea di “Contestualizzazione dell’espressione musicale” si possa realizzare creando e ricreando “spazi condivisi”. Il mio scopo principale nella didattica musicale è “creare gli spazi dove gli partecipanti si attivino nell’esperienza musicale.” Il teatro potrebbe essere proprio il luogo in cui possano convivere i due spazi (reale e dell’immaginazione) ; dove tutti partecipano e si esprimono, ed anche dove il linguaggio musicale prende vita in scena entrando in relazione con gli altri linguaggi e sistemi simbolici (il movimento corporeo, le parole, la trama, i disegni, i colori, la scenografia..ecc.)

Ⅳ　音楽テアートロ形式による創造的活動の提案

IV　Una proposta di attività creativa con il teatro musicale

私の問題提起を方向付けるものとして、日本の子どもたちのテアートロ活動の例を紹介したいと思います。子どもたちは音・音楽、身体、絵の表現方法を協働させながら「鬼と遊ぶ」というテーマを創作し、発表したときの映像です。

Per concludere il mio discorso vorrei proporvi un video che presenta l'attività teatrale dei bambini giapponesi. I bambini hanno rappresentato sulla scena il tema del "Giocare con un folletto" mostrando l'unità fra suono, musica, corpo e pittura .

ビデオ：附属鎌倉小学校 4 年 2 組の創作活動の発表「鬼と遊ぶ」（2010 年 12 月）

まとめ：思いや意図をもって音楽を表現したり聴いたりする
　　―日本の学校音楽教育の理念―
（Conclusione）Esprimere ed ascoltare la musica attivando il pensiero e l'intenzione
－concezione dell'Educazione Musicale nelle scuole giapponesi－

日本の学習指導要領は教科音楽の目標を次のように定めています。

I programmi ministeriali scolastici giapponesi, qui di seguito descritti, definiscono le finalità della musica (intesa come materia scolastica) .

> 表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。
>
> Sia attraverso l'espressione con tutti i mezzi musicali, sia attraverso l'ascolto della musica si sviluppano i sentimenti e la sensibilità verso la musica stessa, si coltivano la competenza di base per conoscere, praticare, ascoltare la musica e accrescere il piacere nei confronti della musica.

日本の学習指導要領は 10 年ごとに改訂されていますが、その中でこの目標にある基本的な考え方は継承されてきました。2008 年版の新学習指導要領では「思いや意図をもって音楽を表現したり聴いたりする」という理念が加わりました。この新しい理念は、音楽との関わり方、表現や鑑賞において、児童生徒一人一人により積極的に参加できる力を求めています。

Queste finalità si sono sempre mantenute nonostante il rinnovamento dei programmi previsto ogni 10 anni. Nei nuovi programmi del 2008 é stato inserito un nuovo concetto : "Esprimere e ascoltare la musica attivando il pensiero e l'intenzione." Questo nuovo concetto intende promuovere negli scolari una personale partecipazione attiva capace di esprimersi in un apprezzamento e buona relazione con la musica.

身体表現やドラマ性といった舞台表現性を生かした音楽教育は、子どもたちが思いや意図をもって表現するために成果を上げることができるでしょう。そして音楽的活動が、さらに舞台表現との関係をより強め展開されるならば、音楽言語はもっと生きたものとなるでしょう。この見地から、

テアートロ教育において音楽言語は他の表現言語と対等に活用されることが必要でしょう。今後、日本とイタリアでテアートロ表現が音楽の表現力をますます伸長させるものとなりよう願っています。

L'educazione musicale con la teatralità consente, grazie al movimento corporeo e alla drammatizzazione, di verificare facilmente se i ragazzi si esprimono attivando il pensiero e l'intenzione.

Se l'attività musicale si svolgesse sempre più in dialogo con la teatralità il linguaggio musicale diverrebbe più vivo. In quest'ottica, nell'educazione alla teatralità, bisognerebbe utilizzare il linguaggio musicale alla pari degli altri linguaggi espressivi.

L'auspicio è che in Italia come in Giappone il teatro rivitalizzi l'espressività musicale.

「音楽テアートロ：領域横断的経験」講演資料（パワーポイントによる）

SEMINARIO di formazione con attività di LABORATORIO IL TEATROMUSICALE
Un'esperienza interdisciplinare

Prof. Toshio Nakajima
professore associato in pedagogia musicale
Università di Yokohama: Facoltà di Scienze Umane e dell'Educazione

L'Opportunità Educativa della Teatralità
- la relazione comunicativa fra i bambini e gli studenti del Corso di "Educazione Scolastica" attraverso l'attività espressiva –

・Le attività nel laboratorio semestrale di "Approccio alla realtà scolastica" ("Introduzione alla Professione dell'Insegnante") con i bambini della scuola elementare annessa alla facoltà dell'Università (YNU)

(1) un'esperienza didattica utilizzando il corpo per creare frasi ritmiche durante la lezione di musica

(2) una rappresentazione del teatro musicale realizzato dagli studenti per i bambini

Ricerca sull'espressione musicale dei bambini con riferimento all'educazione teatrale

2 punti di vista

(1) Contestualizzazione dell'espressione musicale

(2) Due spazi condivisi

(1) Contestualizzazione dell'espressione musicale

L'espressione musicale non si realizza soltanto con leggendo le note, ma si realizza con la buona interpretazione. Questa deriva dalle sensibilità ed emozionalità dell'individuo. Quando l'uomo esprime la musica come "significante", se non trova la sua contestualizzazione, la musica eseguita non rappresenta la vera espressione dell'individuo. Per cui la teatralità contribuisce ad una educazione musicale espressiva.

(2) Due spazi condivisi

L'espressione musicale e teatrale, si esprime in due spazi condivisi dai partecipanti.

- *Primo spazio* : quello dove i partecipanti si trovano realmente e fisicamente, dove possono comunicare, conoscersi bene, avere buona relazione tra loro;

- *Secondo spazio (spazio ipotetico)* : il mondo creato dall'immaginazione dei partecipanti, dove ogni partecipante prende parte interpretando iberamente il testo.

Penso che l'idea di "Contestualizzazione dell'espressione musicale" si possa realizzare creando e ricreando "spazi condivisi".

Il mio scopo principale nella didattica musicale è
"creare gli spazi dove gli partecipanti si attivino nell'esperienza musicale."

Il teatro potrebbe essere proprio il luogo in cui possano convivere i due spazi (reale e dell'immaginazione) ; dove tutti partecipano e si esprimono, ed anche dove il linguaggio musicale prende vita in scena entrando in relazione con gli altri linguaggi e sistemi simbolici (il movimento corporeo, le parole, la trama, i disegni, i colori, la scenografia..ecc.)

Una proposta di attività creativa
con il teatro musicale
"Giocare con un folletto"

I bambini hanno rappresentato sulla scena il tema del "Giocare con un folletto" mostrando l'unità fra suono, musica, corpo e pittura.

Esprimere ed Ascoltare la musica
attivando il pensiero e l'intenzione

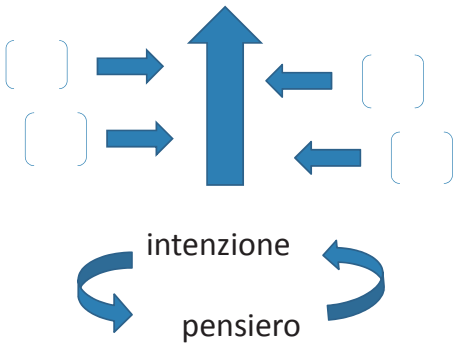
❀❀ Concezione dell'Educazione Musicale nelle scuole giapponesi ❀❀

◇I Programmi Ministeriali Scolastici della Scuola Elementare (2008)

<Musica>
・*Finalità*
Sia attraverso l'espressione con tutti i mezzi musicali, sia attraverso l'ascolto della musica si sviluppano i sentimenti e la sensibilità verso la musica stessa, si coltivano la competenza di base per conoscere, praticare, ascoltare la musica e accrescere il piacere nei confronti della musica.

⇒ *Esprimere ed ascoltare la musica attivando il pensiero e l'intenzione*

Esprimere ed Ascoltare la musica



サクロ・クオーレ・カトリック大学ミラノ校・教育科学部マスターコース『舞台表現性による創造性と人間的成長』で筆者が行った授業の配布レジュメ

「テアートロ表現と音楽教育－音楽言語はシーン（場）によって生かされる」

（於、サクロ・クオーレ・カトリック大学ミラノ校、2009年10月31日）

31 ottobre 2009

Master “Creatività e Crescita personale attraverso la teatralità”,

Facoltà di Scienza della Formazione e Facoltà di Psicologia,

Università Cattolica del Sacro Cuore di Milano

La pedagogia musicale con l’aspetto della teatralità
-Il linguaggio musicale prende vita in scena-

prof. Toshio Nakajima

professore associato in pedagogia musicale

Università di Yokohama

Facoltà di Scienza dell’Educazione

Introduzione - Motivo della ricerca

Ricerca sull’espressione musicale dei bambini con riferimento all’educazione teatrale in Italia.

Sono docente universitario di Didattica Musicale del corso di formazione degli insegnanti delle scuole elementari, medie e superiori.
Ritengo sia importante che gli studenti, prima di vivere l’esperienza dell’ insegnamento al corso di tirocinio, conoscano la sostanza dell’espressione musicale dei bambini.
Quest’ultima è rappresentata da vari elementi: la voce, il movimento corporeo,il gesto, il mimo,la situazione,la percezione e l’immaginazione di una trama(pre-esistente o creata nel momento dell’esibizione), e poi naturalmente la musica trattata.

A tale proposito, ogni anno progetto un teatro in cui gli studenti e i bambini hanno la possibilità di interscambiare la propria espressione musicale. In un primo momento i bambini sono solo spettatori dello spettacolo, realizzato dagli studenti. Successivamente, gli studenti coinvolgono i bambini, i quali sono invitati a partecipare attivamente.
In questo modo i bambini, in diretto contatto con la musica e il teatro, esprimono comportamenti estremamente spontanei.

Attraverso la mia ricerca, vorrei dunque analizzare tale relazione tra l’espressione musicale e il suo contesto e l’approfondimento dei progetti scolastici attuati in Italia, che promuovono

l'educazione teatrale e lo studio degli effetti della loro realizzazione, rappresentando un'importante fonte per la mia ricerca.

I　Un punto di vista "due spazi condivisi"

L'Espressione Musicale, ma anche quella Teatrale consiste in due spazi correlati e condivisi fra i partecipanti.

-Primo spazio:quello dove i partecipanti si trovano realmente e fisicamente, dove possono comunicare,conoscersi bene, avere buona relazione tra loro.
-Secondo spazio:il mondo creato dall'immaginazione, dove ogni partecipante prende parte interpretando il testo.
Ritengo molto importante che ogni partecipante esprima le proprie sensazioni riguardo quello che andranno ad interpretare. Questo è importante per conoscere i punti in comune e le differenze fra i diversi partecipanti per poter cosi' trovare, grazie anche al lavoro, l'interpretazione condivisa del testo.

・La corporeità dei partecipanti si trova in entrambi gli spazi.
・L'espressione musicale e teatrale è condizionata allo stesso modo e reciprocamente da entrambi gli spazi.
・Il teatro (la scena) potrebbe essere definito da questi due spazi.

II　I bambini cominciano ad imparare giocando

Il gioco porta i bambini ad immaginare, emozionarsi e imparare a rapportarsi con gli altri.
imparare giocando　→　acquisire tecnica,teoria, senso estetico ecc..　(→figura1)

Domanda
Perché si valorizza l'elemento del gioco ?

III　Il linguaggio musicale da creare come quello di sé (Importanza della creazione del linguaggio musicale)

Al livello musicale potremmo riconoscere tre diverse dimensioni.

1. La musica può servire all'attività teatrale.
   ・Stimola il movimento corporeo;
   ・Caratterizza la scena come colonna sonora.
2. I personaggi cantano o suonano gli strumenti in scena:usano la musica fatta(compiuta) dagli altri ma la riproducono loro stessi.
3. I personaggi esprimono e creano con il loro linguaggio musicale usando materiali sonori e strumenti musicali.

Domanda:
Come si potrebbe educare alla creazione del linguaggio musicale legato all'attivita' teatrale confrontando i metodi utilizzati per gli aspetti verbali,corporei,ecc. ?
Quale difficoltà si posono trovare ?

IV　Esprimere con il pensiero e l'intenzione
❀❀concezione dell'Educazione Musicale delle scuole giapponesi❀❀

I programmi ministeriali scolastici giapponesi definiscono dettagliatamente la musica (intesa come materia scolastica). Ai fini della mia lezione ho ritenuto particolarmente importanti seguenti aspetti:

❀Finalità

Sia attraverso l'espressione personale, sia attraverso l'ascolto sviluppano i sentimenti e la sensibilità verso la musica, la competenza di base per l'attivita musicale e l'affetto pieno e profondo nei confronti della musica.

❀Contenuto

Esprimere e ascoltare la musica attivando il pensiero e l'intenzione (figura2).

Suggerimento

Articolare i progetti didattici in relazione a diversi livelli intrinseci ai ragazzi:

- il livello *emotivo,* degli affetti, costituito dai rapporti che essi stabiliscono con gli altri e con la realtà;
- il livello *cognitivo,* dell'intelletto, implicante il fatto che il ragazzo venga guidato alla capacità di elabolare concetti chiari fino a tradurli in operazioni logiche;
- il livello *prassico,* del fare, il quale richiede che ogni allievo sia indirizzato alla capacità di operare, nella maniera più economica e produttiva, sempre più autonomamente.

OLIVA,G.(1999), Il laboratorio teatrale, LED, Milano, p.238

Domanda

Come si può verificare e valutare se i ragazzi hanno espresso e ascoltato la musica con il pensiero e l'intenzione?

V　Conclusione

L'attività educativa della teatralità consiste in due colonne principali:il movimento corporeo e la drammatizzazione. Nel corso di questa attività　è facilmente verificabile se i ragazzi si esprimono con il pensiero e l'intenzione.

Se l'attività musicale si svolgesse collaborando con la teatralità (il movimento corporeo, la drammatizzazione)　il linguaggio musicale diventerebbe più concreto e verrebbe maggiormente espresso con il pensiero e l'intenzione.

In quest'ottica, nell'educazione alla teatralità bisognerebbe utilizzare il linguaggio musicale alla pari degli altri linguaggi espressivi.
Questo modo di pensare suggerisce la posizione che l'educazione musicale dovrebbe avere in Italia e in Giappone.

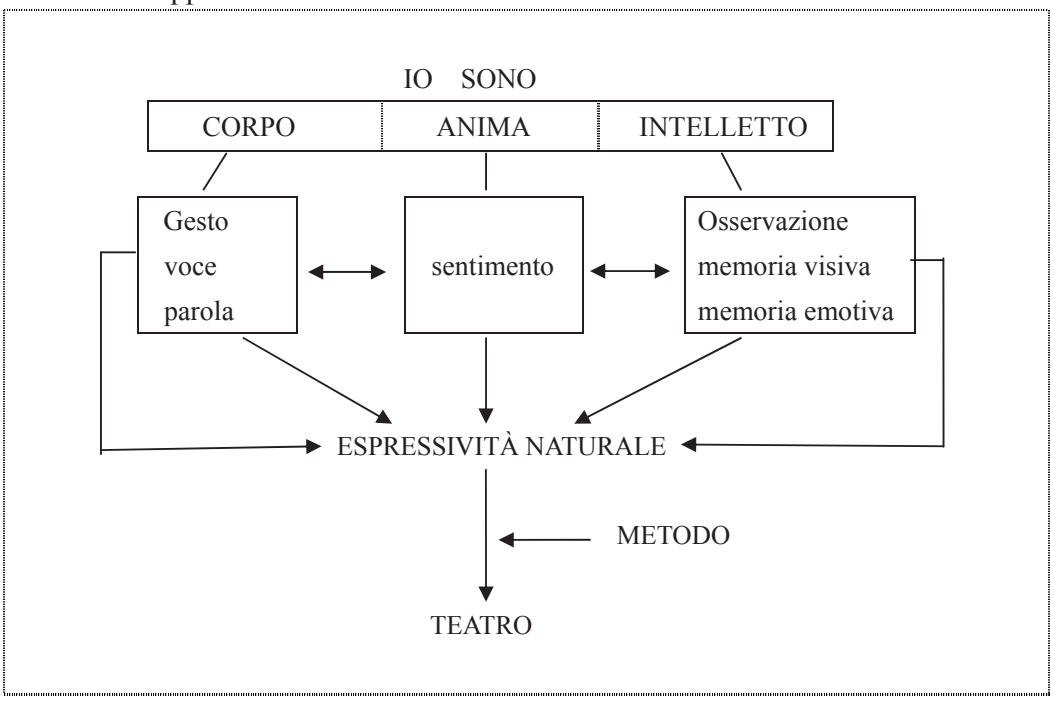


figura 1 OLIVA,G.(1999), Il laboratorio teatrale, LED, Milano, p.98

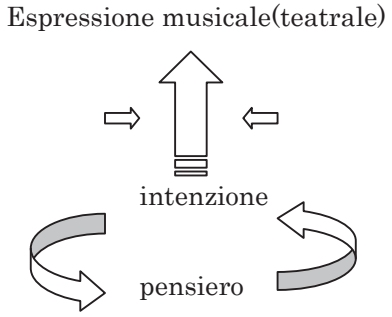


figura 2 (fatta da Nakajima)

サクロ・クオーレ・カトリック大学ミラノ校・教育科学部マスターコース『語りとテアートロ表現相互による教育方法の実践』で筆者が行った授業の配布レジュメ

「テアートロ表現と音楽教育のラボラトリ活動」

（於、サクロ・クオーレ・カトリック大学ミラノ校、2011年3月5日）

5 marzo 2011

Master “Azioni e Interazioni pedagogiche attraverso la Narrazione e l’Educazione alla Teatralità”,
Facoltà di Scienza della Formazione,
Università Cattolica del Sacro Cuore di Milano

L’ attività di laboratorio dell’educazione musicale con l’aspetto della teatralità

Prof. Toshio Nakajima
professore associato in pedagogia musicale
Università di Yokohama: Facoltà di Scienza Umana dell’Educazione

I　Introduzione - Motivo della ricerca

p.81　Introduzione - Motivo della ricerca と同じ

II　Un punto di vista “due spazi condivisi”

p.82　I Un punto di vista “due spazi condivisi”と同じ

III　Laboratorio－Esprimere con le parole, i suoni, il ritmo, la melodia...

Laboratorio 1

Creare un ambiente in cui tutti riescono esprimersi liberamente e a partecipare attraverso le espressioni varie della voce.

Indurre ad esprimersi utilizzando la forma comunicativa.

(1) Utilizzare la forma della “domanda e risposta”;
(2) Utilizzare la forma figurativa;
(3) Utilizzare l’espressione corporea;
(4) Dall’imitazione all’espressione;
(5) Esprimere lo stato e la situazione dell’oggetto.

♪***Yamabiko san, Manekko san*** (Ohi, Sig. Eco, ehi, Sig.Imitatore)
♪***Kobuta, Tanuki, Kitsune, Neko*** (Porcellino, Procione, Volpetta, Gattino)

N.B:
・Le caratteristiche importanti sono avere la voglia di rispondere, presentare se stesso e avere qualcosa da esprimere.
・Con queste attività si impara ad usare le espressioni varie della voce ed anche il cambiamento dei registri di voce.

Laboratorio 2

Cominicare ed esprimersi combinando Suono, Ritmo, Parole, Frase, Melodia... (utilizzo del materiale proprio)

(1) Staffetta dei suoni;
(2) Diversi suoni ma stesso materiale;
(3) I suoni cosa dicono... (interpretazione e dialogo);
(4) Fare la forma del ritmo (rhythm pattern);
(5) Intonare le parole con la scansione e il ritmo;
(6) Creare la melodia dalla frase.

Laboratorio 3

Una buona recitazione porta una buona intonazione del canto ♪♪♪
♪Dio, come ti amo (D.Modugno)

IV　Analisi della sperimentazione sulla combinazione delle attività musicali e corporee dei bambini e degli insegnanti giapponesi ❀

1. Rappresentazione dell'attività teatrale dei bambini
I bambini hanno fatto una rappresentazione sviluppata dalla collaborazione fra suono, musica, corpo e pittura sul tema "Giocare con un demonio".

2. Rappresentazione delle attività espressive con il corpo e con il suono e musica degl'insegnanti al corso di aggiornamento (diretto da Nakajima)
Gli insegnanti si sono espressi attraverso il corpo, vario materiale, il suono e la musica sul tema "Nel bosco".

Processo di lavorazione:
N.B: I punti (3) (4) (5) (6) del processo di lavorazione devono essere applicati in un lavoro binario in qui vengono sviluppati separatamente la parte corporea-materiale (visiva) e quella musicale (sonora).

(1) Discutere su che tema si vogliono esprimere;
(2) Riordinare il contenuto della rappresentazione e decidere la sequenza della costruzione dell'intera opera;
(3) Pensare in che modo poter esprimere ogni contenuto, con quale movimento del corpo e con quale materiale visivo;
(4) Pensare in che modo poter esprimere ogni contenuto, con quale suono e musica;
(5) Provare a rappresentare separatamente le due opere: quella corporea e l'altra musicale apportando cambiamenti o miglioramenti dove si ritiene più necessario;
(6) Rappresentare separatamente le due opere: quella corporea e l'altra musicale.

Riflessione:
i) Per quanto riguarda la rappresentazione dei bambini, si sono potuti sincronizzare i due ambiti, quello corporeo e l'altro musicale?
ii) Si potrebbero sincronizzare i due ambiti per quanto riguarda la rappresentazione degli insegnanti?
iii) Che elementi comuni si sono trovati nei due ambiti?
iv) C'è stata una qualche influenza del corpo per quanto riguarda l'espressione musicale? Se sì, che tipo di modifica ha apportato all'espressione musicale?

V　Esprimere con il pensiero e l'intenzione

Concezione dell'Educazione Musicale delle scuole giapponesi❀❀

p.83　IV Esprimere con il pensiero e l'intenzione と同じ

VI　Conclusione

pp.83-84　V Conclusione と同じ

イタリアの学生・教師・研究者たちと

サクロ・クオーレ・カトリック大学ミラノ校

同上

G.オリーヴァ教授（左）と助手のラウラ

サクロ・クオーレ・カトリック大学教育科学部のマスターコース『舞台表現性による創造性と人間的成長』2009 年 10 月 31 日

同上　受講生と筆者（授業者）

同マスターコース『語りとテアートロ表現相互による教育方法の実践』2011 年 3 月 5 日、受講生と筆者（授業者）

『音楽テアートロ―イタリアと日本の初等教育における研究と教員養成の取り組み』（ミラノ・ビコッカ大学、イタリア音楽教育協会ミラノ支部共催のセミナーにて　2011年3月14日）

同上

『音楽テアートロ―領域横断的体験』（教職研修組織OPPI・イタリア音楽教育協会SIEMミラノ支部共催のセミナー 2012年3月17日）

同セミナー

同上

同セミナーの講師 4 人：左から C.Delfrati（イタリア音楽教育協会創設者），A. Caputo，筆者，P. Bove

テアートロ研究センターCRT での研修の様子　2009 年 3 月

国立ミラノ・ビコッカ大学

同教育科学部の「音楽教育法」の授業　2011 年 3 月

同上

「音楽教育法」担当の E. Ferrari 講師

ロンバルディア州教育研究所の研究員と（中央が R. Di Rago 氏）2011 年 3 月

聖エリア小学校（コモ市）の教師たちと　2011 年 3 月

聖エリア小学校の児童の表現活動

同上

ドン・ゼノ中学校で日本の学校生活について講演（筆者）2009 年 10 月

同上　質問に応える筆者

同中学校の教師たち

同中学校生徒たちと

同前

ロンゴーネ小学校（ミラノ市）4 年クラスの音楽の授業　2012 年 3 月

同上

同上

A.ポンティ高校のテアートロのラボラトリ活動（ガッララーテ市）2009 年 3 月

文化協会「少年たちの舞台」の役員会（ベッルスコ市）2009 年 10 月

引用・参考文献

AA.VV. (2003), *Musica in Scena,*a cura di Carlo Delfrati, EDT, Torino.

Benvenuti, P. (1994), *Introduzione alla Storia del Teatro–Ragazzi*, La Casa Usher, Firenze.

Bove, P. (2006), *Il teatromusicale, Un'esperienza interdisciplinare*, IPOC, Milano.

Bricco, M. (2001), *Alfabeto Teatro,Idee e materiali per un processo teatrale dai tre ai dieci anni*, Erickson, Trento.

Gamelli, I. (2001), *Pedagogia del corpo,* Meltemi, Roma.

Gamelli, I. (2005), *Sensibili al corpo,* Meltemi, Roma.

IRRSAE-Lombardia (2001), *Il Teatro della Scuola,Riflessioni,indagini ed esperienze*, Franco Angeli, Milano.

IRRE-Lombardia (2008), *Emozionalità e Teatro, Di pancia, di cuore, di testa*, Franco Angeli, Milano.

IRRE-Lombardia (2009), *Teatro, Didattica Attiva, intercultura-Teatri visibili e teatri invisivili,* Franco Angeli, Milano.

MPI (1998) : Ministero della Pubblica Istruzion, *Annali della Pubblica Istruzione, Anno XLIV – 1998. N.1/2.*（電子雑誌，http://www.annaliistruzione.it/riviste/annali/pdf/010298/010298ar06.pdf）

MPI et al. (2001) : Ministero della Pubblica Istruzione, ETI, AGITA, ERT-Friuli Venezia Giulia, *Geografia del Teatro Scuola in Italia–Le Rassegne di Teatro Studentesco,* Editrice, Udine.

MPI (2007) : Ministero della Pubblica Istruzione, *INDICAZIONI PER IL CURRICOLO per la scuola dell'infanzia e per il primo ciclo d'istruzione,* tecnodid, Napoli.

Oliva, G. (1999a), *Il laboratorio teatrale*, LED, Milano.

Oliva, G. (1999b), *Il teatro nella scuola*, LED, Milano.

Perissinotto, L. (2001), *Teatri a Scuola*, UTET, Torino.

Valera, A., Penati, C. (2008), "Un laboratorio della scuola primaria – Scuola elementare Don Gnocchi di Concorezzo, anno scolastico 2003/04," In *Emozionalità e Teatro, Di pancia, di cuore, di testa*, (IRRE-Lombardia), FrancoAngeli, Milano, pp.205-213.

佐藤学・今井康男［編］（2003）『子どもたちの想像力を育む―アート教育の思想と実践』東京大学出版会

清水　博　他（2000）『場と共創』NTT 出版

H. シュミッツ（1986）『身体と感情の現象学』小川　侃訳，産業図書

高橋雅延（2008）『認知と感情の心理学』岩波書店

テイト，M.，ハック，P.（1991）『音楽教育の原理と方法』千成俊夫他訳，音楽之友社

中嶋俊夫（2001）「イタリアの学習指導要領にみる音楽言語 linguaggio musicale の理論的基礎―Gino Stefani の記号論的アプローチを手掛かりに」『音楽教育学』日本音楽教育学会編，30-4号，pp.1-14, p.25.

中嶋俊夫（2007）「音楽的体験を共有する場づくりへのアプローチ―初等音楽科教育法授業における学生の取り組みと意識調査を通して」『横浜国立大学教育人間科学部研究紀要Ⅰ』（教育学）第

９集、pp.119-137.
中嶋俊夫（2009）「イタリアの舞台表現教育の動向と創意 ―ロンバルディア州ミラノ県の取り組みを中心に」『横浜国立大学教育人間科学部研究紀Ｉ』（教育学）第12集、pp.119-134.
中嶋俊夫（2011）「小学校音楽学習指導要領の理念『思いや意図を持って』をどう捉えるか ―小学校教員対象の研修（神奈川県立総合教育センター主催）」『横浜国立大学教育人間科学部研究紀Ｉ』（教育学）第13集、pp.111-128.
中嶋俊夫（2012）「イタリアの新しいカリキュラムとテアートロ教育にみる音楽表現の可能性―わが国の教育実践と関わって」『音楽教育実践ジャーナル』vol.9 no.2、日本音楽教育学会編、pp.131-142.
日本音楽教育学会［編］（2009）特集「音楽する身体」『音楽教育実践ジャーナル』vol.6 no.2
日本音楽教育学会［編］（2011）特集「音楽科と他教科の連携」『音楽教育実践ジャーナル』vol.8 no.2
藤田和生［編］（2007）『感情科学』京都大学学術出版会
N. ランド（2006）『言語と思考』若林・細井訳、新曜社

引用・参考資料

Valera, A., Penati, C. によるドン・ニョッキ小学校「テアートロ教育」指導計画・実践記録（2004-5年度）
文化協会「少年たちの舞台」Associazione Culturale “Un Palcoscenico per i Ragazzi”, 2008年度、2009年度報告書
EDUCAZIONE ALLA TEATRALITÀ –LA CONSAPEVOLEZZA DEL SÉ, Corso di perfezionamento, Università Cattolica del Sacro Cuore ; Facoltà di Scienze della formazione, Anno Accademico 2009/2009（サクロ・クオーレ・カトリック大学教育科学部2008-9年度マスターコース「テアートロ教育－自分自身をよく知ること」授業概要）

（CD-ROM）
Ministero della Pubblica Istruzione Direzione Generale dell’ Istruzione Secondaria di Primo Grado : MPI (2000), *IL TEATRO MUSICALE : un’esperienza interdisciplinare.*

（情報サイト）
・（領域横断的経験：テアートロ・ムジカーレ）*http://www.teatromusicale.it/*
・（IRRE-Lombardia）http://www.irrelombardia.it/teatroscuola/
・（ETI）http://www.enteteatrale.it/
・（CRT）http://www.crteducazione.it/pages_crt/
・（ベルガモのプロジェクト）　http://www.teatroscuola.org/esperienza_scuole.htm
・（Opera Domani のプロジェクト）　http://www.operadomani.org/operadomani
・（トスカーナ州プロジェクト）　http://www.progettotrio.it/eduteatri/

あとがき

本報告書では、わが国でほとんど知られていないイタリアのテアートロ教育の現状を、ロンバルディア州での調査を通して把握し、その理念と指導実践から表現教育のあるべき方向について検討した。その成果はすでに筆者の教育活動において試行的に生かされているが、これからさらに、学校のカリキュラム、学校・地域・自治体・民間との連携、教員養成の観点から進展させていきたい。

理念と実践の両面でイタリアのテアートロ教育メソードは種々あり、当然のことながらスタニスラフスキーやグロトフスキー、ラバンをはじめとするヨーロッパ演劇界の巨匠たちの影響も考慮されなければならない。また、感情や認知と関わる諸学の理論との関連性からも表現のプロセスについて精査する必要があるだろう。これらの課題と並んで、イタリアのテアートロ・ムジカーレについても、ネットワークをさらに広げて継続的に研究していきたい。

イタリアのテアートロ教育活動は各組織の連携によって振興されているが、それぞれの部署に情熱と創意をもった人が働いていて、むしろそれら人と人のつながりが組織を動かし、プロジェクトが支えられていることに感銘を受けた。テアートロ教育は舞台表現を洗練させ、様々なジャンルの舞台表現を楽しんできた、まさにイタリアの創意として生き続けるだろう。

2011年３月14日と2012年３月17日にボーヴェ氏の企画により、ミラノ・ビコッカ大学（2011年）と民衆大学（2012年）で、筆者と大学教員、イタリア音楽教育協会ミラノ支部会員、学校教師たちとの交流セミナーが開催され、日本の教員養成や小中学校の表現教育の実態について VTR を交えて紹介し、討議する機会をもった。またロンバルディア州教育研究所の研究員たちとは、同州の＜プロジェクト音楽2020＞の推進のために情報交換を進めていくことを確認している。これからさらに、表現教育の観点から日伊両国間の研究交流を深めていきたいと考えている。

本報告書の最後に、私をあたたかく迎え入れてくれたサクロ・クオーレ・カトリック大学（Università Cattolica del Sacro Cuore）の Gaetano Oliva、国立ミラノ・ビコッカ大学（Università degli Studi di Milano-Bicocca）の Emanuele Ferrari、イタリア音楽教育協会ミラノ支部（SIEM：Società Italiana per l' Educazione Musicale, sezione di Milano）支部長の Paolo Bove、ロンバルディア州教育研究所（Nucleo territoriale della Lombardia-Agenzia Nazionale per lo Sviluppo dell' Autonomia Scolastica : ANSAS）の Rosa Di Rago、文化協会「少年たちの舞台」（Associazione Culturale "Un Palcoscenico per i Ragazzi）の活動を支え、学校教師としてテアートロ教育に携わってきた Biancamaria Cerreda、Anna Valera、Carla Penati、Lina Cazzaniga の諸氏と、ミラノ県で出会ったすべての教師と児童生徒たちに心から親愛と感謝の気持ちを表したい。またイタリア語での種々の書類作成にあたっては、ピサ大学からの交換留学生、Stefania Lauciello、Roberto Cappai、Tiziano Menconi、Francesco Brillante の諸君の助力があったことに感謝するとともに、このことをピサ大学と本学の交流の証として記しておく。

筆者がイタリアで調査・研究を行った2009年～ 2012年の間に、EU 財政危機は深刻化し、現在イタリアでは芸術文化と教育の豊かな関係に影を落としている。一方、わが国では2011年３月11日の東日本大震災以降、人間の暮らしや生き方に対する価値観が揺らいでいる。このような時にあってテアートロは、人間が表現する場を求めることの意味を私たちに問いかけているだろう。

2012年３月30日

中嶋　俊夫

平成 20～23 年度
日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）
イタリアの学校・社会における舞台表現教育の取り組みと
音楽表現の関わりについて
研究課題番号：20530807
研究成果報告書
平成 24 年 3 月 30 日

研究代表者　中 嶋 俊 夫

240-8501　神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台 79 - 2
国立大学法人 横浜国立大学 教育人間科学部
Tel・Fax：045-339-3474